

1950

磐城評論

創刊号

THE /NAKI REVIEW



レストラン

イワキ・サロン

平市田町
電話五九二番

烹割
谷口

電平八番

やさきほんや

忠 角

平市二丁目
電平二八五番

カメラと材料

D P。

各學校
免税品
取次店
平三丁目
たなか
電五七六

薫風さわやかな初夏
皆様に贈る名畫番組

火山脈 監督 安達 伸生
出演 森 雅之、小夜福子、笠智 衆
浅草の肌 監督 木村 恵吾
出演 京マチ子、二本柳 寛
狸銀座を歩く 監督 加戸 敏
出演 ケーキー、灰田勝彦、曉テル子
美貌の海 監督 久松静児
出演 水戸光子、藤川豊彦、京マチ子

映畫は大映
世界館

皆様の映畫常設館

松東 松大 松大
映映 映映
竹映 竹映
金星 金星
座座
綴映 綴映
畫畫
劇場 劇場
内内
郷郷
町町

パンと洋菓子

ハイキング、ピクニックに
どうぞ御召上り下さい

平製パン

電平二十一番

湯本温泉

山形屋旅館

湯本町表町 電湯本四番
鈴木康平



磐城評論創刊號目次

表紙	野木 健男	
口 繪	若松光一郎	
カット	高瀬 勝男 柴田 善登 齋藤 實 川島 誠司 若松光一郎 野木 健男	
常磐炭田開發者片寄平藏	鈴木 光四郎	(6)
炭礦地帯の社會教育	猪狩 勝己	(16)
炭礦と生活	岡井 英男	(22)
婦 警 日記	會田 美智子	(26)
詩 ことば	日野 利春	(30)
愚庵文獻雜感	中 柴 光泰	(36)
天田愚庵略傳		(41)

あの頃の思い出	高瀬 勝男	(42)
熊牛原野にて歌える……(遺稿)	猪狩 滿直	(45)
情熱の詩人滿直	台 原 扶	(48)
「移住民」跋より	草 野 心 平	(52)
ラジオドラマの世界	石 崎 久雄	(53)
ラジオ 炭礦に歸る	小室 正余志	(67)
小説玩具を買う	草 野 正辰	(76)
ジャーナリズム斷想	後 藤 啓	
春と音楽		
白い割烹着		
文藝誌の動向……地方文化について		
執筆者紹介		
編集後記		

(88)(44)(87)(66)(25)(29)



青果物

伊勢屋商店

植田
TEL 56

ポプラ
インキ

代理店
橋本合資会社
平市四丁目電40

洋画材料各種

マツタ油エノケ
船岡キヤンパス

職美協賛城サークル
指定店
魁文堂画材部

平薬局

平市七丁目
薬剤上足立貢一

丸トモ書店

電平一三四番

味喰・醬油食料品店
會津屋支店

平市一丁目
TEL 305

酒銘
福美

石城郡内郷町
四家酒造店

製パン
メソ類 総合

四倉町海岸通り電三六
今井製パン
委託加工

古書賣買

片寄書店

號刊創論評城磐



社論評城磐

昭和四年九月十日
代筆 石 子 孫 實 氏 寫 於 磐 城

常磐炭田開發者片寄平藏

鈴木光四郎

石炭は郷土石城の特色であり誇りである。常磐炭田がどうして開發されたか、常磐炭田の日本經濟復興に果たす役割や地位について論じたいと思う。この稿は去る一月三日、郡山放送局より郷土福島の夕に放送したものを増補したものである。

文献に残る石炭

日本に於て石炭が何時頃發見されたかについては明確な資料はないが、最古の記録によつて想定されるのである。元正天皇の養老四年に成つた日本書紀に「天智天皇七年（西暦六六八年）越國獻燃土與燃水」とあるが、燃水は石油であり、燃土は泥炭と考えられている。石炭に關する本邦最古の資料として筑前國續風土記があるが、これは貝原益軒が元禄十六年（西暦一七〇三年）寫本で藩侯に上申したものである。次のように書かれている。

遠賀郡、鞍手郡、穂波郡、宗像郡のうち、所々山野に有之、村民これを掘り取つて薪に用ゆ、遠賀、鞍手に殊に多

し、頃年糟屋の山にても掘る。畑多く臭惡しといへども燃えて火久しく有り、水風のかまたきてよし。民用に便有り。新無き里に多し、是造化自然の助也。

以上は九州の筑豊炭田の石炭發見の資料であるが、間もなく九州平戸の領民五平太なるものが寶永年間（西暦一七一〇年）對岸深掘村より渡來して初めて石炭を採掘し附近の鹽田の燃料に使用したので、石炭を五平太と稱したと傳えられている。

石城の口碑に残る石炭

口碑によれば、常磐炭田の發見は數百年前と傳えられ、石城郡内郷町の不動澤、鬼ヶ澤部落ではかがり火に石炭を焚き野獸の害を防ぐために用いたと云われ、又赤井嶽や湯の嶽の麓の人々が野火が露頭の石炭に自然に引火し惡臭を發することとに氣がついて田畑を荒す野豬の害を防ぐために利用したとも傳えられている。然し「石炭は地の油なり、これを消耗すれば穀物に不作を來す」と云う迷信から僅かに露頭から自然

に崩壊する炭塊を拾つて使用したのみで進んで採掘はしなかつた。文政二年（西暦一八一九年）石城郡好間村の農夫が山中に於て石炭を發見したとも傳えられている。嘉永六年（一八五三年）水戸藩主徳川齊昭は、現在の大日本炭礦高萩坑地區内に於て石炭を採掘し、海防の急を叫んで海防砲の鑄造を行うために反射爐を築いてその燃料として石炭を用い、茨城の川尻から海路那珂湊に輸送したといわれている。

常磐炭田の發見者 片寄平藏

常磐炭田の發見者は片寄平藏である。彼は文化十年（一八一三年）の二月十五日、石城郡の大森村に生れた。現在の石城郡大浦村大字大森である。よつて大森平藏と稱したが、彼の家號は板屋であつたことから板屋平藏とも稱した。片寄庄兵衛の次男に生れたが、叔父利兵衛が子になつたのでその養子となつた。彼の祖先は越後國の新發田から來た木搦職であつた。彼は養父に従つて材木商をしていたが、若くして商才に富み、笠間藩の御用達として笠間藩領内神谷代官所のみならず奥州一圓に於て取引をしたが、特に秋田方面から桐材を買出しこれを江戸に運搬した。桐は輕いので下駄や家具に用いられたばかりでなく、駕籠の擔ぎ棒として尊重された。彼の取引先は江戸で有名な明石屋こと渡邊治右衛門や、大阪屋庄之助であつた。平藏は江戸の品川沖で當時來航した黒船を見た。黒船の煙突からは煙が出ていたが初めは黒船に火災が起つたと思つていた。しかし燃える様子もないので知人に、

尋ねた處、黒船の煙は石炭の煙であると教えられた。彼は石炭を發見すれば莫大な利益をあげると思つた。彼は心秘かに石炭を探し求めていた。歸郷した平藏は笠間領内を探し歩いたが、或るとき赤井嶽の麓の大利や高野附近で農家の焚く黒い石を見つけた。石炭發見が近いと思つてゐるうち、安政二年（西暦一八五五年）領内仁井田の海岸に於て粉炭を見つけた。

發見の顛末

數ヶ月間仁井田の海に注ぐ夏井川を遡つて探し求めていた。たまたま平市の南を流れる夏井川の上流、新川の橋を渡るととき川の底にコブシ大の炭塊を見つけた。急き江戸に上つて明石屋の鑑定を受けた處、明石屋は、良質の石炭であり黒船の燃料としてその需要が増大するから石炭山の發見に全力を盡せと平藏を勵ました。彼は石炭を發見して大規模に發掘することを決意して郷里に歸り、知人の大森村大字狐塚の高崎今藏と相談した。即ち下流に在るものは上流に在る。新川の上流の白水川には必ず石炭がある？と信じて勇氣百倍して新川を遡つて内郷村に入つた。その頃内郷村は湯長各藩主内藤侯の領地であつて、他領に無斷で入ることは許されなかつたので、芋掘り姿をしてツクシを持つて白水川を遡つて探し求めてゐるうち、遂に湯の嶽の麓白水川に面した彌勒澤（ミロク澤）に於て石炭の露頭を發見した。附近には有名な藤原時代の國寶建造物白水阿彌陀堂や磐城三十三觀音の第四

札場である、つるし観音がある。現今は内郷町白水字廣畑といわれる所で不動澤炭礦や十數軒の家がある。彌勒澤の名稱は古くからその地に彌勒菩薩の石像が川に沿つてまつられていたことから來たものであり、彌勒菩薩は釋迦の入滅した後五十六億七千萬年を経て、この世にあらわれ衆生を導き助け佛として昔から民間に於て信仰されてゐる。その彌勒像は現在附近の渡部政一氏の小高い丘に保存されてゐる。

石炭の露頭を發見した平藏と今藏の驚き喜びは言葉に盡されなかつた。このあたりは當時は太木が繁り晝尙暗い所であつたが、澤は南に切れて奥行は三町位である。自然に土が崩れ落ちて九尺炭が暗い藪の中に艶々と光つてゐた。二人は相擁して泣いたと云う。ミロク澤の地質を調査すると斷層によつて出來た澤であることがわかる。澤の兩岸の山頂に近い所に上層があり、上層の下約六十尺の所に厚さ七尺位の本層がある。この本層より數米下に白水川が流れてゐるので川傳いに探して登つて來たので彼等は露頭を發見したのである。本層の下十尺位の所に下層があり、現在の炭礦はこの下層を採掘してゐると白水の菊池康雄氏は説明されてゐる。

平藏は狂喜して石炭を持つて江戸に上り明石屋に見せた。明石屋は立派な石炭であると折紙をつけたので高崎今藏に採掘させようとした。然し附近は前述の通り湯長谷藩領であつたので、白水里主大越甚六の仲介によつて藩公の許可を得、一俵につき銀一匁の料金を納入して採掘に着手した。このと

き平の加納作次郎もこの事業に参加した。又この炭層を辿つて川平、藤原、宮、小野田方面にも石炭があることを察知した。

當時の石炭採掘法

當時の石炭採掘法は所謂狸掘の方式であつた。常磐炭田は阿武隈山地の東麓の第三紀層中の石炭を採掘するもので、炭層が約十度東に傾斜してゐるから西部に露頭があり、東に行くに従つて深さを増す。それで最初の炭礦は西部の露頭附近に發達し、漸次東に移動して現在のような斜坑、堅坑の大組織的採炭が行われるようになった。大炭礦が炭層を追うて東漸するに反し、小規模な採炭は今尙露頭附近で殘炭を採炭してゐる。緩伊東、東新不動澤、小宮、常磐第三坑、矢郷、壽、磐前、常磐川平、磐城神奈川大山坑、高階の各炭礦は彌勒澤附近に於て採掘してゐる。

狸掘りは初めは露天の石炭を掘り除々と奥深くシキイに入つたが、上盤を支えるために丸太の坑木を以て留柵を施し、貝殻に種子油を入れて燈火とし鶴嘴を用いて掘つた。奥深く入つて燈火が消えるときは逃げ歸り風廻しと云う樋によつて通氣を工夫した。採つた石炭をタンガラと稱する針金で編んだ負い籠に入れて四つ這いになつて運び出した。西曆一八五六年の兼葎堂雜錄には

「其の石炭を取ること金銀を掘出すに同じく、山に穴をつくり左右上等に丸木を以て圍とし漸に入ること數十丈、取

得て外に出る穴口上低き故、石炭を入れたる籠を引き四這になりて出す」とある。

近代的な堅坑や斜坑により、安全燈を用いて安全に採炭作業をしてゐる現在とは隔世の感がある。

朝の六時からカンテラ下げて

坑内通いも 國のため

と云う炭礦節が歌われてゐるがカンテラは、ボルトガル語の燈火の意味であり明治以後に多く用いられた。

石炭の積出

當時の一俵は十六貫の石炭が入つてゐた。それを二俵づつ馬につけて江名の中の作港に運び出した。小名濱港から積出したのは明治十六年以後のことである。一俵につき駄賃は二百文であつたが、馬では能率が上らないので平藏は新川、夏井川を改修し、仁井田浦を築港して船で石炭を積出す計畫を立てたが實現されなかつた。

石炭油の製造

安政四年（一八五七年）平藏は石炭から石炭油即ちコールタールを製造することを工夫し三百樽を造つた。これは軍艦その他外部の腐蝕を防ぐ塗料としてその効用漆に劣らず、又燈火に用いても便利であつたので江戸に出荷した。或る時藩主内藤侯はコールタール製造を視察するために彼の工場を訪れた。現在の壽炭礦の坑夫長屋のあるあたりであつて「アブラ」の地名が残つてゐる。平藏は非常に喜び、藩公を饗應し

たが、時に一計を案じた。即ち豫め竹管を床下より宴席の中央に引き、製油のとき發生するガスに火を点じた。一座これを知らなかつたので点火した明るさに驚いたがその有様を次のように述べてゐる。

「煙氣燃焼たちまち光輝を放ち瞭々座を照して晝の如し、別して銀燭を用いず」

君公はその奇を賞した。今日のコールタールや石炭ガスを當時既に工夫してゐた点は注目すべきことである。當時の許可願が残つてゐるが、これは貴重な史料であるので全文を紹介したい。

湯長谷様願書下案

乍恐以書付奉願上候 白水村彌勒澤石炭製油願人御府内四日市住所紀州様御用達 明石屋治右衛門代 平藏奉願上候事

右者今般白水村於彌勒澤石炭頂戴願上當已の五月より五ヶ年の内右地所小屋場並に釜場とも三畝二十六歩御拜借仕り石炭製油仕り度奉願上候 尙年限中御設の御上納の儀に御座候へば何卒御慈悲を以つて願の通り被仰付被下置候はば難有仕合に奉存候

以上

御府内 明石屋治右衛門代

安政四年五月

大森村 願人

平藏

江戸 御役所

願出世話人

加納作次郎

更に平藏は外國奉行に次の通り願ひ出た。

乍恐以書付奉願上候

牧野越中守領分奥州岩城郡大森村百姓平藏奉願上候 私儀
石炭製納仕候處同國岩前郡内藤藩守様御領分白水村 石
炭製納仕候處に付ては右御領主様より私え御任せ相成當時
石炭製油仕り罷存候處追々異國御交易被仰出神奈川邊江御
開港相成候趣奉承知候間右石炭御交易御用にも相成候はば
私江被仰付被下置度奉願上候

並に磐城産延紙椎茸是又御交易相成候はば御用被仰付下置
候得者 難有仕合奉存候 此段偏に奉願上候 以上

牧野越中守領分奥州岩城郡大森村

安政六年正月

外國奉行様

百姓 平藏

幕府の石炭買上げ

安政五年(一八五八年)十月、幕府は内外の情勢に鑑み軍
艦操練所を置いたが、石炭買上げの命は突如平藏に下つた。
彼は直ちに選炭三千俵を上納し、次いで石炭御用となつた。
彼の苦心が報いられた彼の生涯のうち得意の時であつた。彼
は近郷より牛馬各々百頭を買ひ駄送したが、公儀御用の標旗
を立て、中の作港に向つた光景は豪勢なものであつたと云
う。

横濱開港と石炭の交易

安政六年(一八五九年)二月、幕府は前年六月調印された

仁井田浦築港

萬延元年(一八六〇年)笠間藩主牧野越中守は、年貢米積
出しのため領内仁井田浦築港を計畫した。古來、年貢米積出
しは江の網、四ッ倉二港によつたが、兩港とも天領であり、
代官所の支配下にあつたから手續上煩雜であり、出船の前後
を争つて時期を失することが多く、何かと不便が多かつた。
そこで領内の最も近い海岸仁井田浦を選んだのである。藩主
は平藏を工事監督とした。平藏は奉行武藤盛兵衛及び代官長
壽作や神屋陣屋の諸士や領内各村名主などと共に人夫數百人
を役役して着工した。設計を見ると、仁井田浦字東山海岸よ
り海中に百餘間の小半島を築き千石船の停船場とした。同海
岸は遠淺であるので、激浪は工事を妨害することが多かつた。
ので、平藏は三角棒を作つてこれを沈め、その上に土台を盛
つた。數ヶ月にして設計通りに出来上つた。これがために船
寄せも出来るようになった。江の網、四ッ倉兩港よりも良港
となつたのである。藩公その竣工を喜び平藏の功を賞して彼
を永代郷士格とし、苗字帯刀と乗馬を許した。彼の得意は思
うべしであつた。

平藏は、仁井田浦築港は年貢米のみならず、石炭の積出港
としたいと心に期していた。その頃は石炭の需要が益々増大
し、江名中の作港は規模が小さいので小名濱港から積出し、
大量移出を計畫していたが、小名濱港も天領であつたので仁
井田浦築港を計畫して笠間藩用人田村巖雄に相談した。田村巖

日米通商條約に基いて初めて神奈川開港を認め外國人との交
易を許した。次いで横濱開港が認められた。このとき平藏は
明石屋、高島屋などと共に横濱五町目に石炭販賣店を設け、
外國船と石炭交易の端を開き自ら石炭屋と稱した。更に外國
交易一手販賣問屋を設けて、絹糸、茶及び石城産の延紙、椎
茸を賣出し、次男平左衛門を横濱に置き、高崎今藏を採炭責
任者として白水に定住せしめ、自分は横濱 江戸、白水を往
復したがそのときの定宿は湯本町の山形屋であつた。彼は實
に貿易の元祖であり、現在のように貿易が日本經濟に重要で
あることを考えるとき、平藏の功績は大なるものがあると思
う次第である。

このとき平藩主安福對馬守信正は、若年寄より老中に進
み、外交事務を專掌し幕府の最高責任者として親米平和外交
に活躍していたが、平藏の事業に蔭ながら應援していたもの
と想像されるのである。

草野村光明寺に残る史料に彼の用いた手帳が残っている
が、彼は貿易の必要上外國人から英語を習つていた。そのう
ちに次のようなことが書いてある。1をワン、2をチヨウ、
3をツレイ、4をホー、5をハイ、6をセキス、7をセム、
8をエイ、9をナイ、10をテンと假名づけてあり、今日の發
音と比較すると面白いものがある。後日、横濱の有志は平藏
が貿易に盡した巧績を偲んで野毛山に小社片寄神社を建立し
たが、震災のと、焼失し今に残るものはない。

雄も藩士もこれに賛同したので着工したのである。然しながら
間もなく平藏は病死し、戊辰の役、廢藩置縣となり、停船
場は激浪のために破壊されて空しく終つてしまつた。現今で
も東山海岸にはその跡が残つてゐる。

萬延元年は石城地方に關係の深い年で、三月三日大老井伊
直弼は水戸浪士のため櫻田門に於て襲撃され暗殺された。井
伊大老の後を受けて難局を處理する適任者は平藩主安福對守
信正以外にはなかつたので、信正は關藩藩主久世大和守と共に
連立内閣を組織して最高責任者として時局拾収に乗り出し
た。又信正が派遣した遣米使節團が米國大統領ブキャナンと
會見し平和外交に努力したのもこの年である。

逝 去

片寄平藏は萬延元年八月三日病あらたまつて、江戸の牧野
越中守の中屋敷で逝去した。四十八才の働き盛りであつた。
横濱で死亡したとも云われてゐるが江戸説が確實である。常
磐線草野驛前の光明寺(一向宗)は彼の菩提寺であつて、寺
の過去帳には次のように記されている。

平藏 萬延元年八月三日歿

戒名は至誠院釋法桂良徹居士 とあり更に

此の者は越中守に忠義をつくし獻金つかまつり扶持三人高
江戸中屋敷に死す 行年四十八才 江戸にて死し白骨と成
し親許へ送る 云々

彼の早死は惜しまれたが、若し長命を保つことが出来たら

ば、淺野總一郎、郷誠之助以上の大實業家となつたであらうと思われている。片寄家は身分が低かつたので、墓石は大森高野坂の、館の山にあつたものが光明寺に移されたのである。光明寺は小川江筋の功勞者澤村勝爲の菩提寺でもあるが、境内には大きな柿の木がある。この柿は、平藏が植えた餓頭柿であるが、その柿のもと彼は祖先の靈と共に永久に眠つてゐる。

建碑運動

平藏の死後、明治三十四年四月、建碑運動が起つた。發起人には、大越甚太郎、高崎慶松、關内市重、鈴木重右衛門、酒井角之助、水野忠次の六名である。大越甚太郎は白水の有力者で郡會議長を勤めた人であり、高崎慶松は高崎今藏の祖父であり、關内市重は關内正一代議士の養祖父であり、鈴木重衛門は湯本山形旅館の先祖であり、酒井龜之助は大浦の故酒井村長の先祖であり、水野忠次は小名濱の石炭業者であつた。發起人の計畫によれば、綴驛前に記念碑を建立する豫定であつた。

建碑趣意書は次のようであつた。

故片寄平藏君は磐城國石城郡大森村の人たり世呼んで大森平藏と云ふ。君天資英邁にして智略あり、將に起ちて大に爲すことあらんとす。其平生事を處する概ね人の意表に出づ。君父を庄兵衛と云ふ。其の二男なり。庄兵衛の弟を利兵衛と云ふ。利兵衛子なし。依つて君を養つて家嗣となす。

一、宛宛を上納し小名濱より船に積みて江戸に送り渡邊氏と共に始めて販賣の道を開く。発見より此に到る滲漕經營殆ど一ヶ年實に安政三年五月なり。是れ今の磐城石炭發掘の濫觴而して君を以て炭山の元祖と稱する所以なり。同四年君石炭油を製す炭油三百樽を得て江戸に送る惜哉、其需要前火災にかかりて燬盡す。安政五年幕府軍艦操練を置くや磐城石炭炭質上げの命あり君直ちに選炭三千俵を納め次いで石炭御用達となり安政六年横濱開港に際しては君高島嘉右衛門氏等と共に其經營に與る。其功蓋し亦多なる故を以て外國奉行所の命、君に横濱五丁目の地を與へて石炭販賣所を設けしめここに始めて交易の端を開く。これより石炭の需用日に多く採掘輸出亦益々盛大を加ふと云ふ。君曾て幕府の賞する所となり特に苗字帯刀を許さる。君更に石炭運輸の便を開かんとして仁井田浦築港を竣るや笠間公亦賞して永代郷士とし苗字帯刀乘馬を許す。君の炭業に於ける其の功勞の顯著なり君は萬延元年横濱に在りて病歿す。享年四十八、嗚呼今を去ること四十年前君は我が磐城古來未曾有の大業を開けり。而して白水、入山、小野田、内郷、山口、三星等石炭採掘今日の盛大を致す。豈此君の賜物に非ずや。而して未だ其報徳の擧なきもの甚だ缺點に非ずや。今同有志者と相謀り一大記念碑を綴驛停車場附近に建設し以て永久に其功績を表彰し併せて君が九泉の靈を弔せんことを。諸君請ふ奮つて協賛補助あらんことを。

明治三十四年四月

發起人

利兵衛曾て木材商を以て業となし嘉永安政の頃屢々江戸に出て豪商渡邊治右衛門氏及び大阪屋庄之助氏と相結ぶ故を以て君も亦屢々相往來し互に信義を厚くするを得たり。安政二年六月商用を帯び江戸に登らんとして途次平驛の南なる新川の流に沈みつゝある黒石數個を得てこれを携へ江戸に至り海邊氏に謀つて曰く、此礦物何れか必要の地あらん、氏熟視して曰く、是良好の石炭なり、今や外交日に開け彼の汽罐汽船の燃料となすも其需要亦將に大からんとす、君の郷里若しこれを産せば其の幸福何物かこれに如かん、と。是に於て君大にこれを發掘するの志を起す。直ちに郷里に歸り知人高崎今藏を呼んで曰く、石の下流に在るもの必ず其の上流に出づ、石炭伏在の地は蓋し新川の水源地に在りと。相携へ川を廻り山澤溪谷の間に入り鋭意搜索し終に三箱岳東北の麓なる磐前郡白水村字彌勒澤に於て發見す。彌勒澤山嶺剝脱の處石炭果して一面に露出しありしと云ふ。其炭脈に依り更に川平、藤原、小野田、宮等皆石炭あるの地なるを知る。君驚嘆して曰く、是れ國家の富源なりと。然れども君は舊笠間藩領地人にして白水村は當時湯長谷藩の支配に屬する所謂領分違なり。故にこれが採掘は其道を盡さざれば能はず。時に白水村里正大越甚六氏あり。君これに就て相謀り且つ告ぐるに國產の利を以てす。大越氏亦其の意を賛し大に盡瘁する所あり遂に藩主に請うて採掘を得せしむ。君即ち石炭運上の法を定め一俵に付銀

其の後に於てもしばしば建碑運動が起つたが、今尙實現されてない。年產出炭量二百萬としても數十億圓が石炭の代價として石城地方に入りその恩恵を地方人に與えていることを考えるとき平藏の記念碑を建て、その功績をしのぶことは石城人の務めではないかと思ふ次第である。

平藏の子孫

去る一月二十九日の寒日、私は大浦村大森の平藏の家である板屋を訪ねた。入口に大松が當時をしのぶように植えられてあり、家の周囲は漆を以てめぐらされ豪勢なものであつたように思われた。當主片寄高雄氏は現在北海道の十勝に居住して居られるので遠縁に當る同村大森字原の片寄甚松氏（七十五才）を訪ねて子孫の動靜を尋ねた。老人の話によれば石炭事業に關係していた頃の板屋は威勢のよい生活をしていたさうである。平藏の子孫には利兵衛、唯助、お能壽などが續きその子に次郎なるものがあり、其の他血縁の引いた者は多いがその動靜は明かでない。以上のように平藏の子孫は平藏の死後僅か九十年後の今日その所在さえ明かでないのである。

慶應時代の常盤炭田

平藏の死後平藩主安藤對馬守は、慶應元年（一八六五年）臣服部貞幹に命じて領内好間村北好間地内の山腹にある九尺炭層の石炭を採掘し駄馬で江名の中の作港に運び帆船で江戸に出したが駄賃八百文で收支が償はらず中止してしまつた。平藏の片寄利平や湯長谷の人加納五郎や平の内田爲善、小名濱の柳内兵衛門がその後を繼いで京濱地方に移出した。當時の費用を調査すれば十六貫詰の損にいつて

一俵に付 一錢八厘 探掘費
一俵に付 一錢八厘 蕪代
一俵に付 八厘 坑外搬出費
一俵に付 八錢 運賃
計 十二錢四厘 であつた。

明治初期の常磐炭田（菊地氏資料による）

明治二年（一八六九年）平藩士加納作平は片寄平蔵の鑛區を繼承して探掘に従事した。同年東京の小林なる者、赤井の現在日曹會社の鑛區内に於て探掘したことが明かではない。明治四年二月露國船が石炭積込の目的で小名濱に寄港した。加納作平は平藩知事の許可を得て千五百俵を露船に賣却した。この取引は三十俵につき十圓の割合であつた。これは常磐炭を小名濱港から積出した最初の事であつた。明治五年、後藤象次郎が所有していた内郷町宮鬼ヶ澤坑に於ては、佛人マンス技師によつて初めて火藥による探掘が行われ地方人を驚かしたと云われている。

明治十年（一八七七年）西南役が九州を中心として起り九州炭が京濱地方に輸送されなくなつたので、事業休止のやむなきにいたつた中央の資本家を代表する澁澤榮一や、淺野總一郎は、常磐炭田の開発に着目した。彼等は技師を派遣し、自らもその調査に當つたのである。明治十六年澁澤榮一、淺

と稱し依詰にして搬出した。

明治二十九年には小野田、湯本間の専用鐵道は完成し、次いで明治三十年日本鐵道會社が起工した常磐線は、待望のうちに平まで延長開通された。小名濱からの海路輸送は一變して高速鐵道輸送となつたので、石炭の需要は増大し、短時間うちに京濱工業地帯に輸送され、常磐炭田の價値は高く評價されるようになった。各炭礦は發展し續々と新坑が開發された。

明治後期の常磐炭田

明治三十年三星炭礦株式會社が創立され、入山、綴方面に探掘が行われるようになった。三十一年磐城炭礦株式會社は内郷の鑛區開發に着手した。三十六年白井遠平は入山探炭會社を辭し、好間の群小炭礦を買収した。三十九年資本金五十萬圓の株式會社とし好間より平の胡麻澤を経て舊城山を通り平驛に通ずる専用軌道を敷設し、平驛より石炭の輸送を開始した。四十年綴驛より北好間に三哩余の鐵道を敷設して専用軌道を廢止した。二十三年に津川良蔵が開いた上好間大畑の横坑は、大正六年古河石炭會社となつた。明治四十四年好間炭礦は古河鑛業に買収された。

赤井方面の炭田は明治二十二年平の鈴木清風が開發して以來、磐城、中央、三星、喜美山、大倉、丸菱、畑子澤、品川、大北、東日本、大成、小田、川瀬などの各炭礦が創立された。明治四十一年赤井軌道株式會社が創立され、赤井村常住から好間川中子を経て北目から舊城跡東麓を通じて平驛に輸送された。大正四年磐城線の開通と同時にこの線は廢止された。

今や常磐炭田は京濱工業に近接し日本の經濟再建に重要な

野總一郎兩名出資のもとに資本金四萬圓を以て磐城炭礦會社が創立され、小野田炭礦を買収して採炭に着手した。明治二十年小野田から小名濱港まで延長四里の輕便鐵道が完成し蒸氣機關による輸送が開始された。小名濱沖合には大和丸、長榮丸、神功丸、磐城丸、盛航丸などの機帆船が碇泊し石炭輸送に従事した。當時小名濱港には岩壁がなかつたので、米野の石炭置場から屈強な男が海中に胸までつかつて一俵づつ肩にかついで五十人が一團となつて本船に移した。賃金は一日一圓と云う高價なものであつたと云う。

明治中期の常磐炭田

明治二十二年（一八八九年）磐城炭礦會社は株式組織に改め、資本金を四十萬圓に増資して日本一流の會社となつた。明治二十七年には小野田堅坑の開発に着手した。二十九年竣工した。明治二十八年には磐城炭礦を辭した白井遠平は資本金五十萬圓の入山探炭株式會社を創立し、川平坑を經營し、白水高倉地内に百八十尺の堅坑を完成した。これより先、白井遠平は白水輕便鐵道合資會社を創立し、二十年頃から營業を開始し、磐城炭礦馬車を湯本町三箇に連絡し、向田、辰口、傾城、堀坂などの國道に沿ひ線路を敷設し小名濱へ搬送し延長し、好間、白水、宮方面の石炭を集荷し小名濱へ搬送した。明治二十七年、八年の戦役が起るや石炭の需要が増加し好況時代が到來した。間もなく不況時代が來たが、明治三十七八年の戦役と共に又活況を呈するようになった。

常磐線の開通

役割を演じてゐる。常磐、古河、大日本の三大炭礦を始めとして本縣双葉郡内には上岡、赤城、龍田、木戸、双葉、鶴ヶ崎、福廣、寺澤、石川、淺倉、未續、久共、大久、ミヤ、藤岡、富久濱、久ノ濱の各炭礦があり石城郡内には大和白岩、鹽田、日曹福島、大和、大野大倉、赤井共榮、日曹赤井、品川、赤井、古瀧、成澤、上好間、小田、菊地、日高見、日東宮、川、大畑、町田、峰根、平石、佐久間、浪江、綴伊東、東倉、磐前、笹島不動澤、小宮内野、矢郷、浪江、綴伊東、東新不動澤、壽、磐城神奈川、小野田、植田、天ノ川、下瀧、品川黒田、東海、倉橋上遠野、三和、一ノ倉、安行、萬治、田人、大昭、大谷、日新、日高見川部、福旺、三松、廣部、旭、東出、多喜川部、三福の各炭礦があり茨城地區には多賀、關本、南勿來、常新、東亞、常磐合同、丸充、峰岸、重二、黒前、橋形、川尻、三峰、依上、大子、久慈川、茨城の各炭礦があり數萬の勞働者を擁して年産出炭量は數百萬トンに及び、地下數千尺の地點に於て晝夜を別たす火花を散らして採炭作業に努力している。このときに當つて常磐炭田の開者片寄平蔵の功績を永久に讃えて感謝の誠を捧げることが郷土人の務めであると信ずる次第である。

附記

筆者はミロク澤に近い川平坑の社宅で生れた。父は川平坑、小野田、入山、磐城の各炭礦に二十余年勤めたのであるが亡父も蔭ながら此の稿の作成に援助して下さつたように思われてならなかつた。最後に白水の菊地康雄氏、田子氏の福島民友記事、山口彌一郎氏の資料を參考としたことを附記しておく。

（昭和二十五年三月十五日記）

炭礦地帯の社會教育に就いて

猪 狩 勝 巳



終戦以來我々の社會生活には從來には無かつた各種の要素が入つて來た。此れは個人の尊嚴に基礎を置く民主主義を浸透させる爲に生じた事である。社會教育の重要性が一般に云はれる様になつたのも此の爲である。然し日本人がこれ迄育成させられた條件が民主主義と根本的に相違して居た事に原因して、他の諸要素と同様に社會教育も亦一般に理解されて居らぬ憾がある。社會教育とは改めて謂ふ迄もなく、社會共同生活に於て個人の地位が如何に在るか云ふ事を認識せしめて、この認識の上に立つて社會の發展を期するものである。従つて社會教育が取り上げる事項は社會生活に於て生起する凡ての現象であり、其の對象とする者は社會を構成する個人である。然るに社會教育の具体化に當つて徒らに社會現象の究明を形式的論議に依つて行ふのみで、其の究明の結果個人は如何に行動すべきかと云ふ理解が十分にされて居ない觀がある。青年運動、婦人運動、文化活動促進等が形式的には形を整へて居るかの如く見え、表面的には非常に華やかに見えながら、實質的にはあいまいな物が多く、従つて尻切れトンボに終つて居るのが見られるのは、こうした点に起因すると考へられる。即ち斯くの如き運動に於てこれに参加する個人が切實な要求と認識とに欠けているからであつて、その結果規約とか會務運営の形式とかに拘泥し、これ等を統轄する人事の爲の紛争に終始等一般的に見られる現象を呈するに至り、創立當時に名を列ねた多數の會員も總會には殆んど出席する事なく流會の憂目を見るに至るのである。それでは個人の認識を昂めるには如何にすれば宜いのか、これに就いては各人各様に意見のある處であつて一様には云へ

ぬ事ではあるが、私の見解を以てすれば、個人の屬する社會の生活環境を十分に考慮してその生活環境に順應した運動方針を取るべきであると考へる。斯う謂へば「そんな事は當り前の話だ」と或は人は云ふかも知れぬ。戦時中の翼賛運動の如く上から命じられて生れた組織と異なり、今日各地に組織されている、これ等各種の運動は、現實に其の地方に生活し、其の地方の各般に就いて概ね承知して居る人達に依つて行はれて居るのであるから、十分に生活環境に順應した運動が行はれて居るものと考へられる。然し事實はこれに反して現實の生活環境とは大分離れた方法を以て運営されて居る事が多いのである。私は昭和二十三年八月平市に於て開催された第二回社會教育大會に出席してこの感を深くしたのである。其處では平市及び磐城地方の地理的條件を離れ、經濟的事實を離れた論議が數多く行はれ、其の結果黨派的攻撃又は應酬等も聞かれるに至つたのである。中には傾聴に値する論議もあるにはあつたが、總体的に見て抽象的に過ぎ現實を離れて居た事は否めない。

凡そ如何なる問題もその問題の提起された時と處とに於ける地理的、經濟的條件を離れては理解し難く、従つて解決も困難となる事は云ふ迄もあるまい。その地理的、經濟的條件を十分に理解し、これから生ずる切實な要求に従つた組織、運動こそが眞實のものとなるのである。私が個人の理解と認識とを基本にすべきであると云つたのは斯うした意味に

於てである。個人の各々が斯うした認識を深める事に依つてこそ、運動は活潑となり、運動を通して個人の認識は更に深められ、社會一般の向上が期待されるに至るのである。斯うした観点に於て私は炭礦地帯に於ける社會教育の重要性を指摘したい。

二

炭礦地帯は一般に特殊なものとされて居る。炭礦の坑内に働く者が地下數千尺の場處で、高温と多湿と炭塵の中で働く事が一般の勞働觀念から離れているという事も其の一つの原因となろう。然しもつと根本的な事は、炭礦經營の初期に於て其の勞働力が勞働條件の特殊な爲に一般より求める事が出來ず、罪人又は食ひつめ者等の特殊なものに依つて勞働力を満たしたと云ふ事にある。勿論現在の炭礦にそうした事はなく正常な者に依つて勞務者が構成されているのであるが、未だに一般には昔の事實が先入觀となつて居る様である。此の事は炭礦地帯の社會教育の具体化に於て問題となる事である。即ち一般的社會教育と炭礦地帯に於ける其れとの間に區別を設ける事である。終戦後石炭の重要性の認識より炭礦地帯に對する社會教育が俄に問題とされ、ラジオ、新聞、雜誌、映畫等凡ゆる宣傳機關を利用して文化向上の企畫が行はれたが、それも一時的現象に止まり昭和二十四年九月を契期とした炭礦自賣体制への切替に依り炭礦への一般的認識が薄れると同時に、炭礦地帯への社會教育も亦一般へのそれから切離

されるに至つた。此の事は、炭礦が特別扱ひされる事に依る一般よりの美望より解放された事に於て喜ばしい事であり、他面炭礦地帯の社會教育が漸次おろそかになる点に於て悲しむべき事である。片山内閣の當時、水谷長三郎氏、商工大臣として常磐炭礦へ來た時、私は國家の炭礦に對する施策が寧ろ便乘的に過ぎる事を述べた事があるが、私の見解を以てすれば、此れからの國民經濟に於て炭礦の持つ意義は決して尠くないと考へる。外國との通商が自由となり外地の石炭が多量に輸入されるに至つたとしても、國內産業の保護育成と國內經濟の發展より視て炭礦の重要度を考慮せねばならぬ事は當然である。此の点より見て炭礦地帯に對する施策は恒久的企畫を以て行ふべきである。此の事は亦社會全般より考へても重要な事である。國家の發展は國民の意識の向上に依るものであつて、其の時々には現象的變化に依り國民文化に對する施策を變更する事は良策とは云ひ難い。

然し如何に國家の施策が十分であつたとしても、これを具體化する當事者に於て欠くる處があつては何にもならぬ。即ち其處に個人の意識の問題が起るのである。然し初めから個人の意識が昂められる事はなく、其の意識には勿論高低の差がある。その高低の差を知り此れを調節して行く處に指導者の任務が生ずる。指導者は問題の要点的確に捉へ、此れを地理的、經濟的條件と個人の意識の差との考慮に立つて處理して行くのである。この点に就いては炭礦に於ては從來は問

題があつた。炭礦の勞働條件が特殊である爲勞働者の出身地が一樣でない爲心理的共通性を欠く事である。社會教育の具體化に當つて個人の心理的共通性は重要な問題であつて、指導者がこの要素を見逃す時は事實上失敗する事となる。心理的共通性は個人の屬した社會の自然的條件と、その社會が構成され發展した過程に生じた性格即ち一般に謂はれる傳統とに依り構成される。一般社會に於ては大體此の條件が満たされる。然し炭礦は大體に於て既に發達した社會を離れて存在して、事業の特殊性に依り一箇の集團社會を構成するのであるが、その構成分子である個人は異つた傳統と自然條件に育てられた者であるのが普通である。尤も今時大戰を通じて炭礦勞務者の固定性が増し、經營者が企業の安定を計る爲勞務者の定着を重視して居る事と相俟つて、現在は大凡心理的共通性を構成しつつあるが、炭礦が大企業制度を採つてから僅々五十年前後である事は心理的多様性を未だに残して居る。

三

この事は炭礦地帯に於ける社會教育の具體化を困難にさせ又此れを完全に消化し得る指導者を持つていない事が現状である。今後斯うした方面に於ける研究が十分に行はれる事が必要であらう。

に依り大きな影響を受ける。勿論一般社會に於ても其の社會に屬する主要産業の盛衰に依り影響を受けるが、然し炭礦地帯に於ける如く一産業の盛衰が其の社會の隆替に迄及ぶ事は餘りないであらう。この事は炭礦地帯に於て組織される各種團體が十分に考へるべき事である。特に礦産税及び新設の附加價値税が地方財政に加へられる事になつてこの事は更に重要性を増したのである。

炭礦地帯に婦人團體又は青年團體が數多く組織されているが、その屬する社會に對する認識に欠くる爲十分な活動をし得ない事は現在見る如くである。即ち自己の屬する社會の社會的經濟的意義を十分に理解しない爲、終戦後の混沌とした一般社會狀態にも作用されて、徒らに智識の小間切れを獲得する事がこれ等團體の任務であると誤認して、社會的個人を確立する機会を逸したのである。一般に知名の士又は大學教授等に依る夏期大學の開催が殆んど流行的となつた事とか又は得休の知れぬ文化研究等が何等の計畫性もなく行はれた事は其の著れと云へよう。勿論私は夏期大學や文化研究等が悪いと云ふのではない。炭礦地帯の如く文化的施設の乏しい處に於ては中央に於ける思潮を知る爲にこうした企畫が數多く行はれる事を私も亦希望する。然しそれは飽く迄も自己を確立する爲の一つの手段である。従つて夏期大學も個別社會發展の爲の計畫として大きな企畫の一つとして取上げられる事に意味があるのである。政治、經濟、藝術等各分野に亘つ

て、炭礦地帯の社會的經濟的現實と照合して研究するのでなければ夏期大學は何等意味を持たない。夏期大學が單獨に企畫されこれに對する檢討も行はれなかつたこれ迄の方法は批判されるべきであらう。文化研究に於ても亦然りである。地方文化の現實について何等の豫備智識も無く徒らに中央の文化狀勢を追隨するが如き文化研究は、音樂に對する基本的研究もなく既成歌手の模倣を以て足れりとするノド自慢出演者の如く寧ろ悲しむべき非文化的行爲である。一般に終戦後の婦人團體は然し斯うした傾向に向ひつゝあり、炭礦地帯のこれ等諸團體も亦此の例に漏れない。

元來婦人團體の任務とするものは社會生活に於ける婦人の地位を向上する事にある事は謂ふ迄もない。一般家庭に於ける婦人が社會生活に於て負ふて居る任務は家事一般の擔任と育児である。而してこの二大任務の遂行に當つて解決されぬ幾多の問題が存在して居る。婦人が社會生活に於てその地位を向上する爲にはこの二大任務を如何に處理するかが先決問題であつて、一般的知識はこの点に集中されねばならぬ。法律、政治、經濟等の一般的解釋は家庭婦人に取つて決して不必要であるとは云はぬが、此の問題に關連した事柄より始められるべきである。炭礦地帯の家庭婦人は炭礦の經營的發展狀態に隨つて其の生活が支配されるのであるから、其の特殊條件下に於ける家事と育児を考へて行かねばならぬ。然し現狀に於ける炭礦の婦人團體は決して此の方向に於て指導され

では居ない。婦人解放運動の講演はあつても、台所の合理的使用法に就いて研究會のあつた事は聞かない。國家經濟の現狀に就いての講演會は聞かれても、炭礦地帯の生活様式を如何にするか、又は現在の収入を以て何を如何にして買ふかという研討はされてない。不良化防止の懇談會に於ては炭礦地帯の育児の特殊性又は兒童心理の特殊性が研討されない。全てがこの調子である。従つて家庭婦人は斯うした會合を時間潰しであるかと考へるか又は特殊人達の集まる所であると考へてあまり出席しなくなるのである。經濟的條件を無視し、心理的共通性を無視した結果である。共同購入所に於て一時間以上の時間を持つ爲に空費し、坑内作業に汚れた衣類の洗濯と修繕に數時間を費やさねばならぬ炭礦地帯の家庭婦人にとつて必要な事は、何をどうすればよいのかを實際に手を取つて教へて貰ふ事である。話を聞く事は從來の習慣には餘り無い事である。子供は障害物の多い所で泥だらけになつて遊んで来る。これを監視する丈でも容易な事ではない。紙芝居が來れば三度でも五度でも金を呉れと云ひ、ボンセンベイ焼が來ればそれでも欲しいと云ふ。學校側では家庭との連絡を充分にする爲に土曜日を休日としたが家庭婦人にとつては日曜日でも學校へ集めて貰ひたいのである。これ等の事は家庭婦人の認識不足から由來すると云ふかも知れない。或はそうでもある。然し實際に於て理想的な設備もなく又從來さうした教育も受けて居ない者に對しては無理な話であらう。現在の家

庭婦人で土曜日の一日を子供と共に社會科の勉強を出来る者は一体どの位居るであろうか？不良化防止は斯うした處から始められねばなるまい。婦人團體は斯うした問題を取り上げて現實の解決を與へる様に努力する事が大切なのではあるまいか？理想は着實に土台から導くべきである。編物の講習も洋裁の講習も必要ではあるが、古いセーターをどうすれば更生出来るかと悩み、子供の間食を安くするにはどうすればよいかと考へる現實の必要を先づ満たしてこそ、婦人の地位の向上は確約されるであらう。

青年運動に於ても亦然りである。青年運動の本質は、社會的に未だ發言力を持たぬ青年層が他日に備へて自己を研鑽し發展せんとする處にあると考へる。

従つて青年は自己を如何に確立し、自己と社會とを如何に調和せんとするかを悩みを身を以て悩んで居る現實の姿を、青年團體はよく考へねばならない筈である。青年團體に依つて企畫される事柄は全て此の点に集中されるべきである。炭礦地帯の青年層は炭礦の特殊性より生れる特殊の悩みを持つて居る筈である。文化的恩恵に浴する事無く粗野の儘に放置される青年は如何にあるべきかと云ふ事は重要な課題の一つであらう。從來この課題に對しては安易な方法で臨まれて來た。文化行事に名を籍りた目標を持たぬ演劇音樂會等の實施がそれである。此れは眞に瞬間的慰樂に過ぎず、これから青年層の自覺も將來に對する檢討も生れてはこなかつた。生活

環境の變革を目的とせぬダンス熱も單に享樂的となり、一部の青年層に面白からぬ影響を與へるに至つた。これと對照的に行はれた知識層の動きも亦觀念的なものであつた。青年運動は炭礦地帯の文化的荒地に新たな文化の華を咲かせる事を當面の任務とすべきであらう。この爲には地方文化の特殊性の檢討の上に立つて新たな文化を構成すべきである。純粹な日本文化の傳統を知らず、然も西洋文化の美しさを理解する事も出来ぬ現代青年の將來こそ悲しむべき事である。日本音樂とは小唄であり西洋音樂とは歌謡曲であると考へて居る者の多い炭礦地帯の青年層に對して、將來の日本文化を確實に設立する爲にこそ青年運動は向ふべきである。一般に青年團體が地方祭禮の中心となつて居るが、これも單なる精力の消耗としてのみ行はれる事なく、傳統の意義を知る爲に計畫されたならば更に一段の効果を上げる事が出来よう。其の他社會教育に於て各種團體が取り上げる問題に就き言及すべき点は未だあるが、冗漫に亘ると考へられる爲省略する事として、最後に圖書館問題を取り上げて見た。

石城地方の中心であり常磐炭田の中心でもある平市に圖書館の設立される事は私の年來の希望であつた。近來社會教育の興隆に依り圖書館運動も又活潑となつて、平市民館の一部として圖書室が設けられたと聞いて、私は喜んで行つて見た處、月刊雜誌のみ集めて我々の求める如き書籍は全然見當

らず失望した。勿論市民館の一部として行はれるのであつて見れば豫算上の問題はあらう。然しそれならばその如く何とかならなかつたのだらうか？平市内には相當の蔵書を持つ管理さへ十分であるならば提供してもよいという人があつたと聞く。斯うした人の意見を何故取上げないのだらうか？法人組織にでもして管理を完全にしたならば斯うした人は案外多いと思ふ。費用の不足は寄附に仰ぐ事も出来る。毎年祭禮に於て寄附金が多額消費されて居る様であるが、それが全部と迄は行かなくとも或程度圖書館設立に廻されたなら宜いと思ふ。斯うして圖書館が設立されたならば先頃内郷町の公民館を利用して巡回する事も考へられる。然し蔵書家に於て圖書館設立の爲の圖書の寄附が計畫された。然し蔵書家は誰でもさうである様につまらぬ圖書は持つて居ないし、管理のはつきりしない圖書館に寄附するのは大した價値の物ではない。元來圖書館の如く設備資金の必要なものが隣接した町に設立される事は不完全なものとなる由縁である。この意味からしても、平市に於ける中央圖書館の設立と巡回文庫の完成が望まれる。此處にも青年團體又は其の他の文化團體の地方特殊性に基く運動分野がある。



炭礦と生活

岡 井 英 男

炭礦と云うと、何か殺伐な氣が漲り荒涼とした文化の低い姿を想い出させる。

私はかつてこんなものを漠然と期待し、殉教的氣分を以て、當時華やかな軍需産業に未練なく炭礦志願をしたのであった。念願叶つて、炭礦の勞務に職を奉ずる身となつたが私の想像は全く裏切られてしまつた。と云うのは、私が來てからの炭礦では兎物を持つた喧嘩もなければ、飯場ゴロとか云うものにも會わない。誰も彼もおとなしく、普通の工場と少しも變らないのだ。

炭礦はよく微温湯にたとえられるが、私もこのなまぬるい湯からなかなか抜け出られず、何時か四年の才月が流れてしまつた。勿論抜け出ると云つてもこれは炭礦社會から離れ去ることではなく、迫力ある精神的なより高度の飛躍を意味するものである。生活的には住めば都とか、米の無い時には米があり、住宅不足の折には不自由せず、石炭を無償で配給してもらい、風呂に毎日入れると云つた好條件が揃つてゐると、素晴らしく楽で難い味があるのだ。都會の

友人に對しては、この時勢にこんないい所はないと強がりを出す、それが一つの空威張りであることに氣づき、心の片隅に何となく物足りない淋しさを覺えるのはどうした理由であるのだろうか。始め、私の炭礦に對する想像が極端にドラマチックであつただけに現實の炭礦に飛込んだ時にはいささか宛外れた感じであつたが、時がたつに従つて次第にその中に同化され、自分もまたその構成人員の一人になつた。しかし、何か自分の中に、そして環境自体の中に満されぬもの、空虛なものが包蔵されていることに氣づいたものである。ではその満されぬもの、空虛なものとは何であるか、そしてそのよつて來るところの原因は何であるのか、これから私は述べてみたいと思う。

第一に、炭礦の存在理由は、どんな山間僻地でも露頭或は有望礦脈の發見があつて企業者の採算が成立すれば一朝にして町や衆落を形成し得る。また反對に、都會の眞中で炭層が發見されたとしても、一坪何萬圓もする地域では到底企業は成立しない。いま日本地圖を擴げてみれば、炭

礦地帯は例外なく都市を離れた山間にあることが背ける。こうした地理的條件は、畢竟都市文化から隔絶した空白地帯を除儀無くせしめてゐる。

第二に、炭礦社會はその成立後も外界からシャットアウトされてゐることである。そこから出ている一本の線路、一本の馬車道が、外部に接觸する唯一の經路であり動脈である。炭礦社會の生産物は石炭以外の何ものでもない。炭礦人は、それを貨車で或はトラックで又は馬車で運び出しその歸りに食物を衣料を積んで來る。そして皆で分配する。即ち眞裸で石炭を出し、割當てられた物資で生活するのだ。そこでは切羽と取りくむ肉体的たくましが美的にまで表現されるが、内面的には思考力も創意性も必要でない。與えられたもので満足するより他ない生活である。

第三に、そこに働く人の問題である。炭礦に出稼ぎに來る人間は、大半が農村出身者であると云ふことだ。日本の資本主義の發達の過程に於ては、その勞働力の給源を農村に求めたと云うことは史實に明なところであるが、炭礦は今も昔も變りなくその殆んどが農村の勞働力に頼つてゐる。それは、炭礦勞働が農業勞働と非常によく似た筋肉勞働であると言ふ手取早い就職口であるからだろう。かつて農村から短期出稼ぎに來た勞働者を對象に炭礦勞働と農業勞働と何れがつかつかを統計的に調べたところ、農業勞働の方が重勞働であると云う結果が出た。確かに炭礦勞働は

超重勞働である。しかし見えない委に於て、農業勞働はそれ以上なのだ。しかも炭礦勞働は技術的に單純な勞働であつて、農業勞働者にとつては取りつき易い爲であらう。

次に、これらの勞働者は、炭礦に定住の意圖で出稼ぎに來ることが少いことである。勿論この中の幾人かは沈澱して炭山の人になり切るのであるが、多くは一時の食いつなぎのために假偶し、或は金を貯めれば外に出るの類である。誰に聞いてもその本意は炭礦に定住することを目的としていない。出來れば、一刻も早く、この炭礦地帯から出たいと云う動機で初めからやつて來てゐるのである。しかしこの微温湯は何時の間にかその何人かを同化し、炭礦社會の生粹人を作りあげていくのではあるが、彼等を落着かせない理由として彼等自身の持つ本來的素質がある。それは、彼等の多くが日本農業の特殊性から、當然外に出て行かねばならない宿命を擔つた次男三男坊以下であると云う事實である。従つて彼等の前歴の多くは「家事農業に従事し」であり、その後彼自身の發心からか、或は他の動機によつてか炭礦を選んだのであるが、そこには既に宿命的なあの放浪性癖を内在させているのであり「現金の貰へる炭礦」への誘惑が一時凌ぎにやつて來らせる。しかし炭礦夫となることを人生の最大目的とする民主的考へ方は、日本社會に於ては未だ一般通念とはならない。彼等は外へ出る陷石としての第一歩を炭礦に刻むに過ぎない。

又農村出身者に混つて最近餘り見られなくなつたが「移り者」と云われる労働者がいる。彼等は、身体一つの身輕さで、次から次へと炭礦を渡り歩いて飯を食つてゐるのである。この人々も炭礦社會を落着かせない一要因を作つてゐる。

以上の様な浮動労働力は、絶えず左から右へと流れてゐる。炭礦社會の外見は一定不變に見えても、その内容をなす構成分子の一つ一つは常に色を變えてゐるのである。しかも彼等の受けて來た教育についても思ひ合せる必要がある。

第四に、災害をあげる。炭礦社會の持つ致命的欠陥は災害である。一つのグループとなつて構成する社會の眞只中に、一瞬にして業務上の死を知らされた時の悲痛は、各人の胸をその度にえぐる。誰がこの運命にあつからないとは斷言出来ようか。各人はその運命の可能性を充分に荷つてゐる。擔架であげられる瀕死の重傷、それを迎える人の山、夫を氣づかう女の眞蒼な顔、身内の慟哭、炭礦地帯は黒い幕に被れる。その脅怖は常に炭礦社會に重壓を加える。斯様な社會的基盤の上に立つ炭礦人の人間性は、自然推察出来るであらう。

さて、農村出身者がその大半をしめると云う事は、農村の持つ封建的社會意識の支配する處となる。そこには農村の純朴さをそのまゝ保持してゐる者もあるが、炭礦の持つ

なければ、右を向けと云えば右を向き、左を向けと言え左を向け。尙悪いことに、頭のよくない人間に兎角生意氣がある。生意氣は出しやばりである。よく物事を考えない中にガチャガチャ騒ぐ。騒げば仕方なしについて行く。何かにぶつつかつてどうにもならなくなると投つ放しにする。そして大衆は去就に迷うのである。しかし彼等は、考へる事を知らないから悩むことも知らない。こうしたあり方は彼等の毎日の物質的生活に影響するところ大である。彼等は利己的に生きる。賃金を受ければ直ぐ飲む。金があれば博打をやる。それらは、ジツクリ根を下した生活への考へ方がないからである。

私は炭礦をだいたひ暗いもの、嫌惡すべきものとして定義づけて來たが、將來の可能性については悲觀するものではない。特に私は最近の組合運動に期待する。確かに、炭礦の過渡的組合活動は、小生意氣な一人よがりなそして幼稚な運動であつたかも知れないが、労働者の一人一人が労働者である事を意識するに至れば、沈滞してゐた炭礦労働者の偉大な人間性の發見とならう。

現在、置かれてゐる炭礦の生活環境は、現在の經濟機構の下では如何に企業者に要求してみたところで限度がある。これらは、労働者自身の自主的見覺めと活動による以外からは得られない。私が夢見る炭礦社會の發展は、組合運動が過渡期を経て、健全な團體となり、労働者の一人一

特殊な環境によつてそれを失つて行く者も多い。即ち、土地を持ち、自己の意志により企業者の意識を以つて耕作に従事出来る地位と、賃金労働者となつた感覺は、それを取りまく既成の社會的條件と相対つて、人間の意識を變へて行くに疑いを持たない。彼等はもう積極的な計畫性企畫性を失ひ、たゞ押流されるまゝに生活し、何處かばつんと消極的な忘れかけられた純粹さを残してゐるに過ぎない。

又ここには、都會的なユーモアや明るさはない。やはり農村の持つ憂鬱が支配する。しかも、時折發生する事故災害は、重苦しい壓力を一層この社會にのしかけてゐる。

定着性がないと云ふことは、ここに根から生えたガツツリした物の考へ方を失わせる。その時々あたりばつたり考へ方や生き方を強いる。自分の屬する社會や企業体のことは深く考へない。炭礦が潰れようが、他人に迷惑がかゝろうがかまわぬ。自分だけが食へばよい。どうせ出て行くのだ。現在さえよければいい。彼等は無意識にそう考へる。でたらめな労働運動をやる。或る炭礦はそのために潰れた。

斯様に左翼事件があればこれに雷同し、暴力團體事件があればこれに卷込まれる。絶えず右から左へ、左から右へ大きく揺れる。これは炭礦人一人一人に自主性が無いからに外ならない。そして、二三の無責任な言動によつて大衆はどちらにでも動くからだ。自分自身があまり損にさへなら

人が人間としての自覺と矜持とを保ち、炭礦夫であることを卑下せず、一生の仕事として炭礦社會に溶け込むことの出来る社會である。定着性ある、安心して一生を託せる社會である。この、炭礦に特に缺けてゐる定着性と炭礦夫としての人間の自由を取戻す時、炭礦の生活は健全となり、生産力は發展を期待されるであらう。その時、そこは山間僻地であるかも知れないし、入山して來た人は農村からであるかも知れないし、又他の社會からの交渉は餘りないかも知れないが、このユートピアの世界は喜々として毎日の生活を樂しみ、暗いとばかりをかなぐり捨てた明るい社會となることであらう。

春と音楽

最近地方の音楽界にとつて注目すべきことは、磐城混聲合唱團の活躍である。この團體は、一昨年の秋に結成された磐城と磐女萬の學生による自主的な研究團體で、最近では、湯本中学校のピアノ開き、磐城高校の校歌發表會等に出演し、好評を博した。品もあり、一つの労働氣を持つた愛すべき合唱團である。昨年の春、松ヶ岡公園で磐城公園音楽部のメンバーが野外コーラスを行つたのを聞いたが、何處か歐洲邊の公園にいる様な感じがして、非常な樂しさを覺えたものである。公園音楽部が既に解散した現在、磐城混聲合唱團の存在は地方唯一のものとなつたが、野外にどしどし進出する様な企画で活動してもらいたいものである。

その他、研究團體として、湯本町の若松紀志子氏を中心としたアザミ會が二回定期發表會を持つて居り、同氏によるエリコーナは、既に二十八回もの音楽鑑賞會を持つてゐる。

婦警日記

會田美智子



×月×日

春とは名のみ、この二三日の空つ風には氣も心もほこりと砂にまみれてしまふ。こんな時、特に留置人はあれやこれやの思ひに悩み多いことだろう。

こんな氣持の起るまゝに、留置場へ行つて見る。幸今日は誰一人いない。それは言葉では云ひ表せないが、たしかに私の心の奥底に喜びの影がかすめていた。

人權問題がとやかく批判されている現在、署に於ても常に署長さんから留置場の被疑者の取扱については、十分留意する様注意を受けて居るが、戦前ブタ箱など、云はれていた留置場も世の移り變りにつれ、その形と内容が一變した事は、私達現職にある者よりも、社會一般の人達がよく知っていることと思ふ。常に雑多な生活環境にある人々が出入する不潔な室、不純な室、不快な室であればある程、常に形式内容ともに廣い意味に於ける「美の保持」に注意せねば、と痛感される。

室内に一歩足を進めた時私の目を射た物、それは、あまりにも現實的なあわれみをさそう、らくがき。何故のらくがきか？

らくがきは卑怯な下劣な人間のすることだと思ひながらも、目前の事實を見て、空白な時世の執着が立ち切れずにいる弱者の姿を思ひ浮べると、うなづけられる点もある。残されたらくがきを讀みながら深い考へにふけつていた自分に氣づき、清潔な室で靜かに己を反省してくれる人達を願つて掃除にとりかゝる。

せまい留置場の板壁より罪を犯した人達の、心境の一端を讀みとり得た喜びを感じる。

×月×日

九時頃、署長室に呼ばれた。

何事かと思ひながらノックして入る。

「七丁目のHさんから昨日子供がお世話になつたと云つて禮狀が來てゐる。Hさんに代つて私からお禮を云ひます」

と、署長さんから一葉の葉がきを示され、お禮の言葉を戴き、恐縮してしまつた。

當然のことをやつて、褒められ、爲すべきことをやつて憎まれる。何と矛盾の多いことだろう。

統制の緩和された今日、尙主食の統制法令の下に、私はこの取締りの任にも就く。幸か、不幸か？ この取締りにふれた者は必ず食糧の不足、やむを得ぬ事情を述べて哀訴嘆願する。そして照質者が當然の處罰を受けるのであるが、これが私達への憎惡となる。私達の職務上、感謝と憎惡は常に相反してゐるのかも知れない。

×月×日

春のやわらかな、日差しが室内に満ちてゐる。今日も運轉免許証の書替で朝から忙しい。手すきになつた午後三時半近く、ジーンと云ふ電話のベルに受話器を取る。

「花巻の叔母さんが來たから、なるべく早く歸へる様に」耳になれた母の聲に、七、八年ぶりに會ふ叔母を想像しながら、五時退署、格子戸を開けると、「美智子かへ」聞きおぼえのある叔母の聲に靴をぬぐひまも惜しくそゞくさると上ると、挨拶も待たず、

「まあ、大きくお成りだねえ……、でもお前年頃だと云ふのに、そんな威かめしい服を着て、心の優しいお姉さんの候補者は、みんな逃げてしまふんじやないかへ……」と

びんに白髪めつくりふえた叔母らしい心づかひ。

御配は本當に嬉しいけれども、内心甚だ不服であつた。服装が、威かめしいからと云つて、社會の人に、心まで敬遠されると云ふのは古い警察官に對する考へ方を、そのまゝあてはめるからではないだろうか。私は人に敬遠される爲に、警察官を志願したのではない。

私達は今後、より良い仕事をし、社會の人と接觸する面が多くなるに従つて、世間の人達が、新しい警察を理解しそこに私達を見出して下さるものと信じてゐます。

現在の身分が叔母の云ふ様に、結婚のさまたげになるとは考へていない。然し新しい家庭のため温い味噌汁をつくる幸福を希ふとき、この制服に「さよなら」する時かなと思ふと淋しい。

叔母の一言が次から次、果てしない連想を追ふ。警察官になつた私に叔母は重ねて、御忠告下さる。

「お巡りさんになつたと云つても、女が男になつた譯ではない、何時の時代になつても女は女」

「人に憎まれぬ様になさいよ」と。封建的な考へから抜けさらぬ人達は、女だてらにと思ふ人もありましよう。けれども新に出來たこの制度この職域を、自分の力で育て、行きたいと大きな希望と誇を持つてゐる私は、この叔母の一言一句を味わひつゝ、今後の示唆とする。

×月×日

「家庭の素亂から犯罪者は生れる。」と云はれているが、今日はまぎ／＼とその姿を見せられて、不快な悲しい感じをうけた。

仙台少年院から通牒があつたので、今にも降り出しそうな空に幾分氣をとられながら、午後からA町の或る家庭を訪問した。

「御免下さい」

建てつけの悪い戸を開けて、土間へぬき散らしてある下駄のあいだへそうつと足を入れた。むつと鼻をつくいやな臭。せまく、うす暗い室の中に雜然と置かれてある、僅かばかりの調度品。亂れた室内には陰氣なよどんだ空氣がただよつていた。

手拭で、頬かむりしたまゝの、この家のお内儀さんが、「又K子のことですか」と、しかも顔の不快な表情で出て来る。その言葉、態度は、人の娘だらぬ干渉はして貰ひたくない、と云はんばかり。

夫に先だたれ、生活の道に迷つた彼女は今年十六になるK子の外二人の子供を連れて、この家に再婚してから三年経つ。

再婚先には幸にも子供はいなかつた。けれども主人は前科もちで家庭をかへり見ずに悪事を重ねるばかり。そればかりか、連子の娘K子の操をうばひ、何等良心に恥無いお

ろかな父親。

家庭の教育どころか、無智な野獸に等しい生活の中にとけ込んでゐる、しいたげられた子供達として又その母。たとへ、どん底の生活にあえいでも、正しく生きたい、そして眞の幸福をつかみたい、と思ふ心はさらに無い。何故彼女は、まことの母性愛に目ざめる事が出来ないのかしら？

子供達の前途を眞剣になつて考へたならば、生活能力のない不したならな大と別れて、苦しくとも獨立した希望のある生活に進むことは出来ないものかしら？

私には彼女の心理状態を解することが出来ない。四十女のあまりにも無理解さが腹立しい。罪を犯したK子を責める前に、私はK子の母を憎みたくなる。

不純な家庭生活の影響より、子供として大切な純眞さを失い、身も心も全く兩親よりはなれ、世の無情をなげきながら、つい罪を重ねてしまつたK子が可哀そうでならぬ。母親の依古地な冷たい心は、用意にとけそうもないが何と

かしてK子だけは救つてやりたいものだ。幼い子供達のおびえたさぐる様な目と、冷たくとりすました母親の顔を背にして、心も重く路次裏をはなれた。

ジャーナリズム斷想

後 藤 啓

●ヒルティは幸福論で「新聞は讀まない方が得策だ」という意味のことを云つてゐる。人生を靜かに思索しようとする人達にとつて、この言葉は八分通り正しい。一方この肯定は、ジャーナリストである僕の告白によると、いまのジャーナリズムへの手痛い抗議であると思う。抗議というより輕蔑といつていゝのぢやないか。

ヒルティは勿論今の人ではない。しかし、このひと言がいまのジャーナリズムにも適用されるところに僕の職業的自嘲がある由縁だ。

ジャーナリズムは市民社會の必需品である。市民社會という商品の唯一の有効需要はジャーナリズムなのである。そのジャーナリストは、この商品のブレイマでもあるし時にはその商品のパロメーターとしての宣傳者の役者もつとめる。仲々面白い仕組である。敢て正攻法で云えば市民社會の健康な成長はジャーナリズムの輝かしい實踐を通じてのみ期待出来る。そして市民精神で武装したものこそジャーナリストであるということになりそう。

これを逆に説けば、ジャーナリズムは平凡な常識の所産である健康な知性と豊かな感覺のメカニズムである。そして世が描く正しいウエーブをいつも代表するジャーナリズムこそ、暗殺や暴力や統制の暗い手段の封じ手であるはずだ。專

制國家には邪魔になるし獨裁社會ではポイユットされる商品である。

こういつた一應の御膳立をして、いまのジャーナリズム並にジャーナリスト？を見廻してみよう。雑誌初めその他出版物ひつくるめてジャーナリズムである。然し新聞がジャーナリズムのイニシアティブを握つてゐることに大いに問題がある。僕は大体この新聞をジャーナリズムとして悪口の對象にする。戦が終つて四年経つたらもう資本主義の獨占金融化である。市民社會の常識にいゝ加減という虫がのさばり出した。しかも輪をかけたようなジャーナリズムの追隨ぶりだ。一つのニュースにも解説にもこういつた動きがもたらす危機を「常識的」に織りこもうとしない。尤も申譯的にその場限りの可笑しいのは、ちやんと判りきつたジャーナリストがこの俗悪なジャーナリズムの片隅に一片のカルチアをこめてネームヴァリュエの商法にひたつてゐることだ。異常神經のセンセーショナルリズムと反知性的な露悪趣味は、これからのジャーナリズム會社の値切り品としてますます／＼氾濫しそうだ。壯士ぶつたりおどかしたりする田舎記者のコーナーデイは沙汰の限りではない。

(筆者は元福島民友新聞記者)

ことば

日野利春

「ことば」

いつか秋になつてゐた

それなしには生きていられないと思うものが

あつた

ふりかへることもつらかつた

菫の花が咲き

やがて颱風がきた

低い空の下で日夜

朽ちた船板が暴れ狂つた

汀を歩き乍ら

こんなことを口づさんでゐた

『龜々』

海なりの底の

尾なし龜

手なし龜

あゝ首なし龜』

颱風は二度三度やつてきた

岩はなに腰を下ろし

黒い潮をみつめてゐた

まわる まわる

ぐるぐる ぐるぐる

終のない回轉の渦

氣がつくと

ひとでの殻が掌に残った

地に墮ちた星

かわいた夢

沖では回轉の渦がつづいてゐた

そのようにして

時が過ぎていった

そして

古くからの名月が

中秋の空にきわまつた頃

私は一つの言葉につまづいてゐた

『人と生れたらんしるしには

いかにもして世をのがれん

ことこそあらまほしけれ』

島 影

じつとしてゐる虚しさも

たまらなく思はれるようになった

赤と黒の血の變ほうも

今までにない色で

鈍重な逃亡への

かぎりない頌歌

握りしめた掌の中で

萬年の小石はつめたく動かない

と思つてゐたのに

山の斜面から

森がくづれ 草原がくづれ 石徑が
くづれ

やがて

不可解で 無意味な土の色から

島影が浮び上り

そして

いまよりは

日の光も燈の光もいらな
いはるかな

未來へ――



愚庵文獻雜感

中柴光泰

天田愚庵の研究については、いま磐城女子高等學校におられる齋藤卓兒君が東大の卒業論文として、優秀な仕事をまとめ上げられた。その際齋藤君は、愚庵文獻の一覽を作つて、私にもうつしを送つて下さつた。これによると愚庵の文獻は意外に多く、百二、三十種にも及んでゐる。この目録作製の骨折りは大したものゝで初めて愚庵の年譜を作つた島田忠夫君のかつての功績にも匹敵するものである。この中には、私の讀みたいと思つて讀めなかつたものもある。例えば、鳥居素川や中川小十郎の文「日本及日本人」の愚庵追悼號など。勿論この中には、私の讀んだもので入つていない物もかなりある。これに加え、更に、愚庵にふれた子

規關係のものを加えたならば、その數恐らく二百にも達するのではあるまいか。

さて、私には私なりに、特に關心を持つ文獻、たとえば、田岡嶺雲の「今日の漢詩人」という文章や、落合直文の書いたものその他二、三あるし、又愚庵研究家として忘れられない島田忠夫君は、私の竹馬の友でもあるので、以下愚庵文獻雜感と銘うつて、何やかや文字通りの雜感を試み、筆のついでに、少しばかり過去の文獻の題口もたゞいてみようと思ひしからぬ心算なのである。

愚庵の生前に刊行された彼の著述は、「東海遊俠傳」と「巡禮日記」である。「東海遊俠傳」は彼のかつての養父清水次郎長の傳記で、親友の大岡育造の世話

で明治十七年に出了。成島柳北が校閲しているのは面白い。この原稿は明治十二年彼が二十六才の頃書かれたものである。この本はその後の次郎長傳の種本となつた。小笠原長生が「大豪清水次郎長」の中で珍本としてあげている胡蝶園主著の「清水次郎長傳」(明治十九年出版)より、この方が早いものであることは特筆してよい。次に「巡禮日記」であるが、これこそ愚庵第一の書であつて、彼の歌境いや人間そのものの刻期をなしたものである。岩波の國語教科書その他にもよく取られてゐるものである。最初「日本新聞」にのり、その後明治二十七年に刊行になつた。これが解説の一つとして、藤森朋夫氏の「巡禮日記に現はれた短歌」(岩波

... 36 ...

國語特報）は丁寧だが、その精神への肉迫が不足しているようだ。

次に、愚庵の傳記として有名な「血寫經」であるが、これも最初「日本新聞」に續載され、のち、「愚庵遺稿」「愚庵全集」に收録された。明治のユニークな文人として知られた饗庭篁村が、最初愚庵が書いたものを書き改めたものと言われる。篁村自身も言っている通り、親を露ねる彼の生涯を主として書いたものである。ので、悲哀の氣多く、センチメンタルな傳記になつてしまつており、愚庵の眞骨頂を消してしまつてゐることは止むを得ないが遺憾である。この點を訂正してゐるとも言えるものが、陸羯南の書いた「愚庵遺稿」の跋や、羯南全集の中にも收つてゐる「今昔感」(明治二十三年)という記事などであらう。私がとくに羯南の記録を重要視するわけもこゝにある。

ところで、相馬御風氏の「愚庵和尚とその他」(大正十二年)の中の「愚庵の一生」と昭和九年に出た「曙覽」と愚庵一の中の「人及歌人としての天田愚庵」とは同一

の文章であるが、その傳記に關する限りはほとんど「血寫經」の書き直して、何らの新味もない。しかし歌と人に參入してゆく御風氏の親切さは自ら別で「二綠蔭閑話」や「聽雷雜記」のような好隨筆も生れる所以である。

愚庵の旺盛な研究家で、「良寛と愚庵」（昭和八年）、「愚庵の歌」（昭和十一年）、「愚庵和尚傳」（昭和十八年）その他の著者である大坪草二郎氏の傳記も、あまり「血寫經」と變りない。殊に愚庵の郷土の調査の行き届かない結果、つまりぬ誤りが目立つ。たとえば、湯長谷（ゆながや）を（ゆはせ）と呼んだり、御厩（みや）を（おうまや）としたりしている。ついでに、彼の「愚庵の歌」の中では、中川霞城を中川小十郎のことであるとしているが、これは別人で、子規門下の俳人、中川四明のことである。

「血寫經」には郷土の平時代が殆んど書いてないのであるが、これを補うのは同郷の研究家の責務であらう。ところが、黒澤常葉氏、諸根樟一氏その他二、三人

の愚庵に關する記事を見ても、いづれも中央で出た「人名辭典」の類の記事と大差のないものであるのは甚だ遺憾である。必ずしも愚庵に限らず、こういう傾向のあるのは、よくある郷土研究の欠点ではあるまいか。新資料がないとしても新解釋がなければならぬ。この二つ共無いのであれば、何をもつて研究と言えるであらうか。

この点で、昭和十三年、福島縣立圖書館から「福島縣の三歌人」を出版した湯本喜作氏の勞を多とするものである。湯本氏はもとゞ歌人でもあり、「連月、元義、愚庵」や「短歌論考」その他で、たゞびんゞ愚庵にも觸れてゐるのであるが、この「福島縣の三歌人」は特に注意したい。安田銀行の福島支店に四年程在任した置土産がこれなのであるが、その土地にあれば、その機會を生かして、そこでなくては得られないものを得てゆくその態度がよいと思う。會津の澤田名垂、中通りの安藤野雁、濱通りの愚庵を扱つたものである。本文はつき足しつき足しし

たような妙な格好のものが、世の愚庵傳が「血寫經」を殆んど一歩も出ないのに對し、愚庵の兄の眞武の記事その他で多少とも新資料の發見に成功したことは特筆してよい。彼がこれの中で書いてある「愚庵の父母妹遺骨發見説」は、かつて島田忠夫君が「アララギ」昭和六年八月號に發表した「愚庵和尚父母妹の最後」なる一件をやつつけた文である。こゝで島田説をくわしくのべるいとまはないが、彼が功を急ぎすぎた結果、どこかの馬の骨かを遺骨と早合点しまつた失錯である。しかし島田君と自分とは古い友人だから言うのではないが、彼の愚庵研究家としての位置は不動で、愚庵和尚年譜の作成（昭和六年九月號アララギ）や愚庵が次郎長の許に寄食中物した未發表草稿「戊寅口占」の發見（昭和六年）、その他特筆すべき功績は多い。少年時代私の家から一町ばかり離れた柿の木のある畑中の家に住んでいた彼は、若くして島木赤彦の愛顧をうけ、その後、歌に、童謡詩に、俳草書に、まれに見る天質を示してき

た。戦争中栃木縣の烏山のお寺に疎開していたが、ついにこれからというところまで死んでしまつた。戦争の一寸前、私が上京して彼を松村英一氏宅に訪ね、二重廻しを着た彼と連れ立つて、おでん屋で一ぱいのんで、その足で尾山篤二郎氏と岡山巖氏を訪ねたのが、彼と會つた最後であつた。自分の著書の廣告に、映畫俳優のプロマイドのような肖像寫眞をくばつたりするキザなところはあつたが、それでも何かにくめないうところがあつた。彼が、最初岩波から出した「柴木集」は長くその光を失わぬであらう。それにしても富山房から出る筈であつた「愚庵研究」の大著が實現し得なかつたことは残りおしい限りである。

あたつて、これは「愚庵全集」と改題刊行され、昭和九年三十年忌に改訂増補版が出た。次に研究文獻としての嚆矢で、最大の業績は、齋藤茂吉氏の大正四年アララギ誌上から五年、六年の「短歌私鈔」續短歌私鈔にいたる「愚庵和尚の歌」であらう。この齋藤氏の評釋こそ愚庵の文學史上の位置を決定した劃期的な役割を果たしたばかりでなく、その後における愚庵愛好者にあたえた影響の大なることはかり知れないほどである。相馬御風氏が彼を知つたのも「愚庵遺稿」とならんで、茂吉氏の本を通じてであり、湯本喜作氏も「愚庵の外傳を知り、この歌壇人ならぬ僧侶の歌に驚いたのは本書の賜であつた。」と言つてゐる。なお茂吉氏は、改造文庫中の「秀歌百首」にも愚庵の歌をとつてゐる。別にこの文庫から彼の歌集が氏によつて出される廣告を見たが、これはどうなつたから。氏の「新釋和歌叢書」中の「新釋愚庵和尚歌集」も私は未見である。改造社發行の「現代日本文學

全集」中の和歌の巻には彼の歌二十首と略傳が出ており、卷末の「明治大正和歌史概観」は茂吉氏の卓見を示す論稿で、その中で「作樂、愚庵、禮殿」と題して、民間萬葉歌人の系列を描いてゐる。この外小泉芝三氏の「元政、良寛、愚庵」や法月俊郎氏の「愚庵の手紙」等も見がせない。

植松壽樹氏の編註したものに「愚庵元義歌集（昭和三年）」がある。この書の特長は愚庵の筆蹟が多く見られることである。又校訂の勞も多しといふ。なお植松氏がこの本の中で、疑問としてゐる愚庵の「眞民」という署名であるが、私が、愚庵の姪のセキさんにきいたところ、彼が眞民（まさたみ）と名乗つたことがあつたさうである。兄、つまりセキさんの父の眞武（まさたけ）を眞似たものらしい。ついでながら湯本氏が眞武（しんぶ）と読んでゐるのは正しくない。

愚庵の歌友子規の書いたものに、愚庵に關するものがあるのは當然で「仰臥漫錄」「松籟玉液」「猊祭書屋日記」等に

出てくる。子規の弟子の虚子氏の文に「柿二つ」という有名な文章のあることは誰でも知つてゐる。愚庵が子規におくつた釣鐘という柿にちなむ話である。なお彼は正九年四月號ホトトギスに、子規と一緒に愚庵居を訪ねた時の思出を、なつかしい筆で書いてゐる。

こゝで愚庵が、子規と共に明治短歌の二大潮流の源をなす落合直文とも若干の交渉のあつたことを記さなければならぬ。愚庵はその昔、直文の養父の落合直亮から國學の手ほどきをうけたのである。私の考えでは、明治六年、仙台で、二十才の天田五郎（愚庵）と十三才の鮎貝龜次郎（直文）とが顔を合せてゐると想像される。さて、彼と直文との關係にふれた文獻としては矢吹弘文氏の「落合直文」以外にはあまり見當らない。直文の「萩之家漫錄」中の「古土器」と題する一文は面白い。短いからのせてみる。

愚庵、余に一つの土器を贈れり。高さ三寸、徑五寸、口大きく、腹ふくらかに、尻すばまれり。色淡黒にして、

やゝつやあるなど、蓋し南蠻の最も古きものならむ。この器花瓶か、はた水瓶か、はた茶壺か、はた酒壺か、愚庵に問へば、いづれに用ふるもよろしい。余性偏固、絶えて變通の才なし。愚庵のこの器を贈れるは、諷するところあるにや。しるして自ら戒む。前記「落合直文」の中で、矢吹氏は、直文の次の歌、

僧 愚庵に

生死の界離れし君なれどなは千代ま

は、愚庵の死に際して直文のおくつた歌であるといふが、これは間違である。愚庵の死は明治三十七年一月であり、直文は前年の十二月に死んでゐるからである。これは恐らく病床の愚庵におくつた歌であらう。僧愚庵に」という詞書もさうだが、第一歌そのものからして哀悼歌ではない。矢吹氏のこの書には、時々妙な誤記が目につく。私の持つてゐる隨筆類の中で、愚庵關係のものに、河井醉茗の「南窓」（昭和

十年)中の「愚庵のこと」、山村暮鳥の「暮鳥隨想」昭和十六年)中の「歌人愚庵」萩原井泉水氏の「古人を尋ねて」昭和十八年)中の「指月の森」がある。醉若ものは期待したほどのものでない。暮鳥のものは、愚庵の生地の手で牧師をしていた頃かいたものであるが、これが後の「雲」時代の彼であつたなら、同じく雲を愛した愚庵との相逢は、一寸興味があると言えようが、何分倒錯美時代の當時の彼には、彼の宗教は藝術で、その藝術は即ち宗教であつた。また斯うも言へる。彼には宗教も藝術もなかつた。唯眞實の人生があつた。程度のところでお茶をにごすよりほか手はなかつたであろう俳人井泉水氏の文章はさすがに深味ある遺跡訪問記をなしている。この外志賀直哉氏の隨筆高田浪吉氏や宮島達州氏の本、その他歌人や俳人や佛教關係の人の書いたものに注意すべきものもあるが、一々あげ切れない。浅野晃氏の「文藝の道」及び「明治の精神」中に收められている愚庵論も注目するが、著者自身

の意圖のために、愚庵の一面のみが強調されているらしいがある。

次に、最も重要な文獻の一つとして、田岡嶺雲の「今日の漢詩人」という一文について是非一言しなければならぬ。愚庵の明治における萬葉調歌人としての地位についてはすでに定評があるので今更述べるまでもないが、漢詩人としての彼については、まだ／＼知られていない。漢詩人としての彼を語つた文章もまれである。天才漢詩人中野道彦をあれほど賞美した日夏耿之介氏の「明治大正詩史」でも、愚庵の詩友國分青崖を百代の師たらしめんとする井上靈山氏の「明治大正漢詩概観」においても、わが愚庵については一言も觸れていない。では、いつた彼の漢詩はどうなのか。明治評壇の鬼才田岡嶺雲の言うところを聞こう。(前略)これらの鶏群の中に就き、ひとり嶄然として頭角を抜く孤鶴たるものを愚庵となす。彼の詩、杳然として火食人の詩にあらず。枯淡簡樸、詞短うして意永し。言外の情趣搖曳たり。こ

とに五言絶句の如きに至りては宛として唐人の口吻なり。彼れ蔬筍の徒なりといへども、しかも詩理路に陥らや。これけだし彼が悟道に得るところ多かるべしと雖も、またその詩人として一種の天才を有するを見るなり。近世の詩境吾人の服するところただこの人あるのみ。この人と青崖とを除けば、他はいふに足らず。(後略)

私などは漢詩をよく解しないのであるけれども、たゞ幾度も愚庵の作をよんでいるうちに、評者の慧眼に、服せざるを得ない。もちろん、子規や、青崖なども彼の漢詩を大いに認めていたことは事實である。

愚庵の漢詩となると、郷土における彼の先師神林惺齋や、その弟の大須賀篤軒(大須賀乙字の父)とのつながりが頭に浮かんでくる。彼の和歌は郷土とほとんど關係がないので、彼の文事上の郷土とのつながりは漢詩のみということになる。この意味でも彼の漢詩は見直されてよい。

以上濃淡とりまぜて雜感を試みたが、最後に、私自身の貧しい仕事について一言することを許していただきたい。私は昭和十六年頃からいろいろ資料を集めたり、遺族の人に聞いたりして準備を進め二十一年の初め、約三百枚の原稿にまとめ上げた。戦争末期のこととして、暗い電燈の下で一枚々々清書した不自由さが思い出される。「愚庵の生涯と藝術」と題して、當時の面倒な手續もどうやらすんで東京の某書店から出版されることになったのが二十年の二月。ところが間もなく戦火によつて出版社焼失、私の原稿は辛うじて助かつたが、そのまゝ出版をみないでいまだに本箱のすみっこにあるという始末。私としてはこの中で出来るだけ彼の郷土時代の解明に力をそゝいだつもりである。

外二度ほど公開の席で彼について語つた私の愚庵についての愛着は深いつもりだが、研究の方はまことに浅い。それに私の貧しい能力が二分されることをおそれ、最近はおつぱら自分の専攻とする英文文學の方にのみ身を入れていたので愚庵の方はいよ／＼心細い。若い優秀な人達の研究によつよりほかない。特に齋藤卓兒君に期待している。

(追記)

愚庵の郷友で、最も親しかつた江政敏という人物は後年實業界の奇傑として知られたが、かつて實業の日本社であつたか、實業家の列傳風の本を出したことがあり、その中に江も加わつておりそれが愚庵の執筆にかゝるものであつたというところを、先年物故した眞木鏗吉翁(江の甥)から私は聞いた。もしこれが本當なら興味ある文獻と言ねばならぬ。誰か見た人はいないだろうか。

(おわり)

天田愚庵略傳

安政元年平城下に生れた。幼名久五郎。父は甘田平太夫。明治元年十五才で戊辰の戦に出陣。同年七月平の落城に際し父母妹行方不明となる。これから親を尋ねる彼の生涯が始まる。天田五郎と改名した彼は明治四年上京、終生の恩人山岡鐵舟の知遇をうける。北は北海道から南は台灣にいたる所謂詩と現實の放浪生活がつづく。この間志士的人物との交渉が多かつた。神官、寫眞師、開業事業、新聞社員と、いろいろのことをやつた。一時清水次郎長の養子となる。明治二十年三十四才の時有名な滴水禪師の剃度をうけ、鐵眼と稱した。

明治二十五年京都清水産寧坂の草庵にうつり、初めて愚庵を名乗る。この頃から正岡子規との關係深くなる。翌年西國巡禮を試み、彼の萬葉精神の開眼が行なわれた。明治三十三年伏見桃山の新庵にうつる。禪と詩と歌と旅と病の幾年の後、明治三十七年ついに立たず、一月十七日小説さながらの數奇な一生を閉じた。時に五十一才。

あの頃の思い出

(主として詩の會について)

高瀬 勝男

まだ回顧談を語る程の老年にはなつて居ないけれど、近頃戦後派の論法でゆくと、廻りくどい時空の外に新しい歴史観が誕生するものだと思ふ。聊さか柄にもなく力んでみて、あの頃の思い出を書く次第。

山村幕鳥さんがたしか聖公會の牧師さんで平に居られた頃は小學生の私で、文學や繪畫をやりだした私が三野混沌(吉野義也)さんを知り、草野心平さんを知り、その他この地方の少壯詩人達を知り、迎えられて仲間入りをしたのは十八、九の頃だつたと思ふ。幕鳥さんのこの詩の運動は牧師さんといふよりも詩人として著名であつただけ、平で刊行した雑誌、「風景」による影響も又大きく「聖三玻璃」風は草木にさゝやいた「雲」の詩集を發表、「月夜の牡丹」等次々と纏まつた原稿が日本詩壇に發表されたことを思うとき當時の幕鳥さんの詩の運動は、詩の精神とともに深く人生に根ざしたものであつたのかも知れない。加へて最も適格な詩の指導者であり詩の開拓者であつたのかも知れない。

私は人間幕鳥さんを知らない。併し幕鳥さん達が創生し、その後一時中絶してゐた詩の會を私達によつて再びおこした。幕鳥さんの追悼會を市内長橋の性源寺で施行、愈々私達によつて詩の會は動き始めた。集るもの、三野混沌、中野英雄、石川武夫、松本純一、猪狩満直、小林直人、高瀬勝男の詩歌人、後程になつて二、三の新人が参加、さかんに快氣焰を擧げたものだ。幕鳥さんのこの詩の精神はどうであれ、あくまで純粹なイデアにめられた魂の讃歌はお互い各様の素直さで育つて居た。私達は卑屈を排撃した。

三野の播種者を開墾派と名づけ、中野、小林を中心にした乾杯群を人生派とでも名づけ



たか。松本、石川、高瀬の路傍詩は浪漫派に属すべきもので、いづれにしても、愉快な仕事ぶりだつた。

「初めに言葉あり、言葉は人」ともあり、言葉は神なりき。實に卒直に逞ましく思うことと思うまゝ、一杯のコーヒで、ボードレールを語り、ヴァレリイを語り、古いところでアレークがあり、マチス、ピカソ、カンデンスキート、日本詩壇の藤村、辻潤、宮澤賢治、犀星、朝太郎は序の口、東西の詩人、畫人を總なめにして、尙遜色ない俺の詩を俺の詩と昂然たるものであつた。もうもうたる紫煙のなか舌端より空中高く吾等の抱負は擴がつた。社會科學研究が、いち早く齎され、マルクスの「労働と賃金」クロボトキンの「パンの略奪」ウエルズの「革命草案」ブーシキン、ボクダノフ、エセイニン等の藝術論も讀んだ。

兎角して藝術は社會機構の單なる依存物ではない。もつと目的化された意識のもとにあるべきもので、吾等は知性を社會批判に向けるべきものだ。と、一面、藝術の自立性を叫びながら詩の會は社會主義的傾向をもつて流れてきた觀がないではなかつた。

平には詩の會を中心にした詩人群と、雑誌詩南社の一派が別方面で相當活潑な動きをみせて居た様だつたが、身近さを感じなかつた故か、文學青年の集り位にししか關心を止めなかつた。たまたま柴田徳二氏の斡旋で地方に散在する同人誌の投合が計られ、第一輯「無軌道」を刊行、後に「無軌道」から「RRR」「突」となり休刊してしまつた。

私は「豚物語」「逢行」等の戯曲を書いた。また油繪を描いてゐた私は「月夜の埋葬」「戀と死」「死人焼く煙り」「亡魂」「死の床」ことごとく陰惨なテーマで作品を發表してゐた。「炭礦夫」「坑内作業」「詩人三野の家族」百號のキヤンパスに、思想を體驗を塗りこんで居た。

同人誌刊行の熱は冷えた。文藝講演會、詩の朗讀會、詩の展覽會、雑誌から離れた吾等は街頭へ進出し初めた。これなどは、松本、石川、高瀬の路傍詩事件が機縁となつての大衆運動であつた。詩人はもつと行動的でなければいけない。自由であるべき筈だ。吾等は歌う、正しき者の頌歌を、愛を、生活を、いと豊かな美の國を三人は辻詩を街壁に貼つて歩いた。三野が、詩集「生活者」を刊行、高瀬が「赤の斑点」を、中野が「顔と樹」を草野心平の「銅羅」は東京で刊を重ねた。エスプラント、研究講座が中野によつて始められ、繪と詩の街頭展覽會、詩原稿の街頭販賣、童話と童謡の會、戯曲朗讀會、めまぐるしい程狭いこの土地の文化面を掃きめくつた。人達は吾等を長髪族と名づけ危険思想家とし今にして思へば滑稽な話だが、逐一吾等の行動は監視付であつた。愉快な詩人群は来る日も来る日も常に若々しく、明快であつた。二人、三人集ると場所をさらわす詩の朗讀をやつた。三野のボソボソと讀む詩、石川のドモリ口調、高瀬の説教型、中野の重厚な音聲は魅力があつたし、小林は弱々しかつた。歌人松村、高橋は口早く、各人各様の質といおうか詩作品にもこれが表れ、斯く

して皆親父になつてしまつた。松本、石川、小林が物故し、街に幾人ぞ昔のなかもりようりようとなつた。詩の會のことは誰も語らなくなつた。據り集つた情熱は時と共に消えた。随分む茶であつた私達、併しなんだかんだ謂つても華々しい在り方だつた私達の後に、私達程愉快なすぐつたなまがあるだろうか。勇敢に時代の前ふれをした連中があるだろうか。満洲事變、支那事變と、戦争の温床となつて居た社會狀勢は必ずしも無事平穩ではなかつた。學究から闘争への道を通つたなまもあつた。いろいろな意味で詩の會の詩人群は検討されるべきであらうけれど、激しい彈壓にもめげず、詩精神に生き抜いた若さ、ダンスと女友達にうつつてぬかす今の若い人達の、何々文化會と比べて、二十年前、時代だなあと思ふ。

執筆者紹介

- 鈴木光四郎氏 磐中を経て中央大學法律科に學ぶ。
 磐城女子高等學校教官、磐城史談會同人。
 猪狩 勝己氏 常磐炭礦製作所勤務、社會・労働問題の研究家、三重縣出身、慶應大學卒業。古河好間炭礦勞務課勤務。
 岡井 英男氏 北海道岩見澤高女卒。平市署勤務。
 會田美智子氏 磐中を経て青山學院に學ぶ。磐城高校教官、英文學者、翻譯、エッセイ等多數あり。
 中柴 光泰氏 湯本町三函に家具店を営む詩人。農村問題の研究家、著書詩集「地の末裔」あり。
 日野 利春氏 洋畫家、平を中心とした昭和初期に於ける藝術運動の一員、平市一丁目に住む。
 高瀬 勝男氏 本名吉野義也、筆名三野混沌として著名、磐中を経て早大英文科中退。詩人山村暮島と親交を結ぶ。現在北好間の高台に梨晶を經營、
 台原 扶氏 農村問題の權威者としても名高し。
 猪狩 満直氏 好間村出身、昭和の初期、文藝運動に従事、全国各地を放浪の末昭和十三年好間にて没す。「移住民」その他の著書あり。
 石崎 久雄氏 磐中を経て長岡高校に學ぶ。磐城地方に於けるラジオドラマの研究に先鞭をしるす。平商業高校教官。
 小室正余志氏 本名小室政義、常磐炭礦内總務課勤務、「人間創生」「からくり人生」等の脚本あり。
 草野 正辰氏 本名齋藤實、常磐炭礦勞務課勤務。洋畫、酒にたしむ。
 若松光一郎氏 磐中を経て美術學校油繪科に學ぶ。湯本町三函に住む。新制作派協會協友。
 野木 健男氏 磐中を経て美術學校建築科に學ぶ。古河炭礦營繕課勤務。
 川島 誠司氏 常磐炭礦庶務課勤務。
 柴田 善登氏 福岡縣出身美術學校師範科に學ぶ。磐高教官

熊牛原野にて歌える

一九三一年のノートより

猪狩 満直

仔羊のごとくに子らは引かれゆく
 昨日古譚に
 今日熊牛

なにがなし
 不安の色のただよひて
 子らの面や色さびてあり
 人様の飯と思えば
 子らもまた
 遠慮がちなり飯時ごとに

君はまだ苦しみたらぬというか
たくさんなり

三野混沌よ

大けな

大けなというが君の口ぐせなりき

三野混沌よ

善惡も

醜美もさらにとびこえて

跳躍せよと君は言うなり

大けなとはつまりづるくということ

づるく づるく

われには不可なり

いまこそは

マンチヨクさんの完成の時にてあれば

と言いくれしきみ

馬鹿にてもちつぽけにてもしかたなし

われの思想に

われは生きなん

体ぢゆう風吹くごとし

昨日 今日

打ちこわれたるフイゴにも似る

猪狩さん休みなさいと

皆いうに

意地にはあらじわれ休まず



熱情の詩人満直

台 原 扶

沖積土のふかふかした川中子に生れ、地下水低い肥沃な土地に育つた素直な性格を備った彼、猪狩満直。どうした事か土地のひとびとは違つてつもしを曲げていた。百姓のかたわら繪や詩を書いていて、その仲間に妻木泰治や猪狩四郎などがいた。大正三四年頃、僕が現在のところ開墾を始める時、時折遊びに来た。猪の時は猪、人參ごぼりの時は人參ごぼりなどさげて来て、開墾小屋で煮てともに食ふながら談笑した。例の大きな笑聲を上げてさかんに話すのであつた。その頃、僕は澤山詩を書いていたので彼もまた詩を書きだした。妻木や四郎も書いた。そこで雑誌を出そうか等と話がまとまり、陸稻を二斗ばかり僕の開墾地から收穫したのがあつたから、これを賣り飛ばし、謄寫版を一台買つた。ガリ版の「ハンシユシヤ」というのを出した。

然し、百姓の餘暇にこの仕事は、容易ではなかつた。主

として僕が編集した。これは農民生活の描寫になまな現象をそのまゝ表はさず。美を創造することに力めた。勞働しつゝ感動をもとめ、無限に書けたのであつたからいつも詩はのせきれない程あつた。満直はゴッホを讀んでいた。當時熱情の詩を愛した粗削りな作品が多かつた。當時僕は山村暮鳥氏と交つていたので、氏もまたハンシユシヤに寄稿してくれた。僕らの村好間でこのことがだん／＼知れ渡つてきた。平市でも知られてきた。平市からまたそちこちの地方にも。だがハンシユシヤは飽く迄も農民自身の農民の詩であつた。ハンシユシヤはながいこと繼續した。もとより美文的なもののはきけたのと、ジャナリズムにそむいたかど／＼しいところから理窟なしに藝術に突入していかうとしたから、その方からの悪評をもらつた。けれど少しもためはず努力した。

満直君は一方封建的な義理の父親と家庭的によくいかな

かつた。當農上五六反百姓では面白くもなく、もつと廣々した耕地をいじつてみたかつた。そしてデンマアクの農業を研究し出し、その理想郷をどこに求めるかについて悩むようになった。或日彼は北海道に行くことを言ひだした。僕は北海道の氣候が彼に適しないことゝ、その農業の容易でない点から極力村に止まることを主張した。どこでやるも同じだし、彼の健康を思つたからであつた。彼にしてはこのまゝではじり／＼貧しくなり、遂には仕様のない百姓に溺れ落ちることを識つたからだ。今にして立ち上ろうとしたのであつた。一度は僕の言を容れてふみとゞまり、僕の開墾地に小さい小屋を立て僕が借した土地を耕やし始めたが、どうして食うかに困つたので再び北海道に志した。彼は所有地のうち三反歩の田を賣り、千餘の金を持つて妻と共に北海道に向つた。移住である。

満直はバイアルやフランシマカを叩きつけ豪壯な大自然とつとくむため、まだ寒い春、北へ北へと走つていった。そこは銅路國舌辛原野である。夏でもガスかゝる舌辛三十町の平原に立つた。彼は胸震えし、その土地とつとくんだのである。後で僕に小さい寫眞を送つてくれたり彼が書いたスケッチを送つてくれたりしたが、ほんのみすばらしい小さい小屋を妻と二人で建て、住んだ。馬を二頭買い鶏を飼ひ開墾も大分進んで種時き（イナキビ、カボチャ、イモ等）した。同時に僕への舌辛通信は始つた。馬をアオとい

ゝ可愛がり鶏は卵を生むと鴉にとられる。鴉群がおそろしく彼に挑んでくるといふ。熊の足跡も何回か見た。いなきびを刈りおくれるともう雪の下になつてしまふ。いなきびを米の代りに食べる。ジャガイモを食ひ。南瓜を食ふ。南瓜を食うて顔が黄色になる。仕事をしつゝ間ジャガイモを煮ている。年中ジャガイモを食うて働く。そうでない。働けない。まるでこちらに居た時と違つた生活を始めた。雪にやけ、日にやけ、面は黒くきたなく頑健になつた。これは、實際は榮養はとれない。それに濕氣多いガスの爲に度々健康を害した。のみならず、生産品は安く經營費はかさむので、冬になつてから木材運搬にそりを曳いてアオと稼ぎに出る。運搬費を惡質な會計に持ち去られたりして困つて居た。附近の小炭礦に勞働に行つた。そうして農業をし續けていたが、北海道アイヌの生活を歌つた詩人、更科源藏氏と彼はその地に於て識りあつた。二人共良い素質の詩人であつたし、壯快な氣持の持主であるからお互に力になつたことだろうと思う。また彼は色彩により夢中になつて北海道の姿を描こうと努力した。パリ／＼という雪水の音を詩の中にもつていた。水三〇度の舌辛の野にアオと共に縦横に走つた彼は、以前よりはなお一層速度的な詩を見せた。くやしがりな彼はいつもスケールの點で僕に追い付こうとし、のりこそうとさい力めたことはその後通信などにより正直に訴へてきた。北海道に行く前であ

つたか、草野心平氏を訪うたので同氏の刺戟も大きかったようであつた。村山槐多的な草野は、當時早く花のように明るいよい意味ではなばなしいスタイル的な詩を見せたからで、この點で同氏の將來の出發の確かさがあつたりした。それを満直は早くも察した。そうこうしているうち妻木も朝鮮に行かれた。開拓移民である。彼は妻子を連れて群山市外の開拓に行つたり、何の音信も断つてしまつたので、ハンシユシヤはあひなくなつた。満直の移住後、詩は山のように書きあげられた。草野氏は東京からドラ誌を發刊された。僕もその同人の一人となつたが後満直も加はつた。そしてドラ社から満直の詩集「移住」が出版された。この中にもられた詩は張り切つていてどこに觸れてもロダンの彫刻にさわつてゐる氣持ちがし、北海道の自然に彼自身が素朴に現實化されてゐた。彼の妻は不如意な生活の爲、無理な働きを繼續した爲か病氣となつてそこで倒れた。萬策つきて彼は悄然としてその白骨を抱いて歸國した。すると間もなく彼は第二の夫人を娶り、相携いて新生の意氣で再び舌辛の我家へと戻つた。現在、未亡人であるタカちゃんである。タカちゃんも信念の強い寛大な方で、その上健康な方である。だから舌辛の開拓事業は市廣く押し進めることが出来た。殆んど完成したのだ。ジャガイモや稻黍の外にテンサイ等迄作付してみた。しかしやはり生活費を稼ぐに充分ではなく、それのみが當時の農業政策は移住民

にとつて何等善い政策でなかつた。勿論土地は所有したものの、その經營には少しも努力に對してむくいられなかつた。依然働いて食ひない農業であつた。働いて食ひない百姓にならうとした満直は、あらゆる智慧をしぼり、ありつくり力を出した。精根限りある彼も、とうとうその土から離れるより外なかつた。そろ／＼健康を害し始めた。釧路灣からのしあがつて濛々冠るガスは、彼の畑の作物を害するばかりでなく彼の体力をそいでしまつた。舌辛か、内地か、しばらく迷うようになった。こゝで死のうか内地にしのび込もうか。凡らく北海道の大自然も、そしてあの煙吐きあげるそこちの噴火山も、いまは彼の土とつくも熱情も何かあだのように感じられてきた。彼は然し剛情だからノウといつてみた。ノウと肯定しつゝ、さよならをゆうか、それは彼の輝ける瞳を最大に大きくしたであらう。彼はわにに小さい頭を振つて、すべてを成し終へたかのように、またそれと何でもつてこい、なしこなしてやるといつた、ような態度にあらたまつた。彼は遂にさうならんと阿寒、舌辛に告げその踏地を切つて漂然として妻と共に故郷川中子に舞い戻つた。舌辛三十町歩をヘイリの如くすてゝ、また塵くさい内地へ薦のように高く舞いながらやつてきた。早速、僕のところを尋ねてくれたが、僕としては或わと思つていたからさして驚きもしなかつたそれよりもこれからどうするかについて心配した。咯血で舌辛の地をそめてき

た彼は、今後はそう強い勞働には耐えられまいし、まだあの封建親父が川中子に白眼でみている。以前とは違つて近所隣りも彼には何かびつたり来ないものが湧いた。そこで僅かばかりの所持金に加へ、差當り間に合うだけのぎり／＼一杯の資金をつくり、養鶏事業を始めた。平市外小島の山際に小さな居をかまい、鶏舎をつくり、病める身をふり起して朝夕ヒナの飼育に専念した。まんざらしろうとでなかつた彼は技術的にも相當進んだ。養者の經營は長く續けてのみ實がある。それには最初から次の資本の回收、その次々と續かねばだめだ。彼はその力も失つてきた。病はつづつてくる。子供達も二三人あつた。彼は繪を描く彼は詩をかく、草野氏の「ドラ」や「學校」に時折その作品を發表した。いまそれらの詩について何かかきたいが、僕の手元にはそれらの何もないので残念ながらかくことができない。いわゆる行動の詩は、あまりに感傷性に富み複雑してゐた。といつて室生、萩原、山村三氏等が中心になつて起した過ぎ去つた感情詩派の後期殘滓の詩などみえたがそんなつまらないものでもない。彼にはドストエフスキイ的な人間苦が多分にあつた。詩を大きな自由の視野に置いたかわりに、飽くなき人間のかつとうを戦つた。暗い息詰る感情に、平和を快晴な世界をこいねがふた。その両面を一緒にした表情をもち、即座に行に鏡のよう映した。いかにして文字をつくるか。文字に形相を與へたかつたよう

だ。詩をあらつば、彫刻し始めた。僕は詩に行きづまつて詩作を断然止めてしまつた時も、彼は不思議に不満をもらしながらこつこつ書いていた。彼の詩は山ほどあるだろう。いまも残つてゐるのだろう。しかし彼自身發表するところと容易な仕事でなかつたらしい。先づ見てくれと僕のところを持つてきたり送つたりした。そうしてゐるうち、コタンの詩人更科が北海道からこんどはこしらに訪問してきた。草野や土方なども来た。山村幕島氏はイツハマで四十才で雲の詩集を上梓し、その製版を見ずに死んだ。僕は満直と二人で水戸の聖公會堂に會葬した。雲の詩の朗讀があつた。日本最大の象徴詩人がたをれた。幕島氏平市在住五年の間この足跡は異常に大きかつた。のみならず平市を中心とする文藝復興は幕島當時の「群衆へ」のその後めざましいものがあつた。満直は石川、松本、高瀬、中野等の新しい諸詩人をも知つた。タランテラ、ルルル、野麥、海岸線等の詩雑誌相次いで出た。それらへも執筆したと覺えている。満直であるが、皆は満直と呼んだ。マンチヨクは養鶏も捨てた、最後に妻子と共に川中子の實家に引き戻つて来た。よくならうよくならうといつてゐたが衰弱がまして来た。僕は満直が親戚からよくないことをきいたのですぐ行つてみた。もう少したつたらよくなるだろうといつたが、ぼだんざくらのさく四月、タカチャンのかいほうをうけつつ遂に彼はたをれた。大きな未完成のまゝ、三十代にしてたをれ

た。北海道吾々時代の作品は立派なもので、それはその當時最も好評を博したものだ。「移住民」一巻は彼の代表作品で、附けて「脱走者」一巻もある。

官覺鋭敏な光と影の詩人松本純一もその後たれてしまった。純客觀詩人石川武夫は滿洲で死んだ。腸チブスだ。光り彩どり平詩壇の花が、重なりくる嵐に散れた。草野心平氏も弔意を表して供養の會に顔を出した。ほつとしてこれは何だといったらう。それにしても農民詩人としての満直を失つたことは、農夫がその最も大切にしたい、とつておきの種子をねづみに食はれてしまつたようにおしい。剛情で熱情の詩人満直は壁を破り蓋を開けるまで突進する。ほんとうの詩をつくる迄いかなければならなかつたからだ。百姓ある限り土地から離れ難い、それを離れた。開墾地をもとめた。それからまた離れた。ひばりはいつも豊饒な野にのみえない。高台の農地にもいつか移住するものだ。そこまづければ高い山原にもいく。ひばりはひばりだ。ひばりであるだけだ。彼は身をもつて詩人だ。眞に地を知るものは地から離れる。地から離れた百姓になる。これは理屈がよいになるからごねたくなはない。藝術だつてそう。南亞に仕事をしているピカソ。南佛のマチス等、最近新聞でそのことを報道されたりしたが(讀賣)そんなことはあたりまいだ。日本アンデパンダン果して何を造らうとするのか。遂にひばりとなつて飛びあがつてしまつた満直が歌はあれは藝術でないというならいへ。彼は夢中になつて

勉強した。ごまかしのない仕事をして失敗した。それはどうであつても、ないで歌つて働いて宙空から今限石になつてまづさかさまに大地に落下するひばりだ、それとも火山涙(ベレスティア)それでいいでないか。何人もその前に頭があらがないと思う。それでこそ光榮ある詩人満直とゆうべきだ。日本北門の入口に立つた一詩人だ。彼の歌はこの門に彫りつけられた銘だ。

「移住民」跋より

磐城平の場末の街道を膝駝版を背負つて自轉車につて、その時してゐた僕の仕事の手傳ひにやつてきてくれた。それ以後會はないからもう五六年になつてゐる。その頃彼は三野混池君といふ雑誌を出してゐた。南風を切つてそれに字をほつて墨をつけた表紙のきいたない雑誌刷りの全く土だらけの手でつくられたきたならしい雑誌であつた(恐らくこれと銅鑼とが日本で作られた雑誌刷りの雑誌の始めではないかと思われ)そしてこれら親しいはえぬきの土百姓が平町の小さい會場で演説などしてゐたのである。

あの軍鶏のときかのやうな磐城山脈の雪や小石をふくんだ猛れつなカラツ風の中で炭坑の煤煙や魚市場や葦藁の小屋の中であつた田圃の畔で二年に一度位海を渡つてくるエトランゼの僕がアキの磐城なまりでどんなに彼等の愛に打たれ元氣にうたれ熱れつに打たれたかしのなかつた。北海道に渡つてからの彼に就いては彼の手紙が彼を物語るだけでそれ等の通信を掲げて彼の戦ひを記したいのであるがそれは詩を通して幾分なり出てるので省くことにする。

昭和四年八月

草野心平



ラジオドラマの世界

石崎久雄

吾が國に於いて放送事業が開始されてから二十五年を経た今日、その聴取者の數も飛躍的に増加して日夜何千萬の人々が放送に親しみ、然かも、近くは民間放送も開始されようとして居る。

思えば、日本に於ける放送事業が過去四半世紀の短い期間にこれ程までに發展しようとは、誰一人として想像も及ばなかつたことであるに違いない。斯様な發展に伴つてラジオドラマも次第に重要性を帯びて、現在では殆んど總の番組の中はこの型式がとり入れられる様になつたのである。尤も、斯様な在り方はたして良いものかどうか批判の餘地はあると思われるが、兎も角、聴取者にとつては絶えずラジオドラマに親しむ機會を與

えられて居るわけである。

然し、吾々が一度ラジオドラマとは何かと云うことを考えて見ると、映畫や舞台劇に比較して遙かに親しむ機會に恵まれて居りながら餘りにラジオドラマに就いての知識がないことに驚くのである。

従つて、戦後の特異な現象とも觀られて居る演劇熱の勃興に際しても、ラジオドラマだけは地方の演劇團體から殆んど棄て、顧みられない状態にある。尤もこれはラジオドラマが放送局を通して電波に乗せない限りその終極の目的が達せられないと云うこと、然かも、現状に於ては放送局の分布状況が極く僅かの都市にのみ限られて居ると云う吾々にとつてはどうにもならない制約が存在する爲であると思ふことも一應認めないわけに行かない

のであるが、然し、當地方に於てはこういう制約も或は近い内に解消出来るかも知れない機運にあり、もしこのことが實現するとすれば、吾々にとつては何と云つても喜ばしいことに違いないのである。もし放送局が近い將來に設置されることになれば、急激にラジオドラマが當地方に於ける多くの演劇團體によつてとりあげられることは明らかな事であつて、然かも、それに伴つて地方文化も飛躍的に向上して行くこと、思われるのである。ところが筆者の乏しい経験からすれば、ラジオドラマはラジオという機械を媒体として成立するものであるといふことから想像以上の困難な面も有して居つて、思う程簡單には所期の効果をあげ得ないものなのである。だからと云つて、

地方の演劇団体がラジオドラマをとりあげることが不可能であるというわけではないのであつて、寧ろ、筆者は地方の演劇団体が多額の経済的負擔を背負いながら、肉体的にも時間的にも無理をしながら、舞台劇を公演するよりは、ラジオドラマの方が遙かにこれらの面で適當したものを有して居るという考えを持つて居るものである。たゞ筆者が此處で云いたいことは、前述した様に、機械を媒体として始めて成立するというラジオドラマの特性からして、ラジオというものを充分に理解し、且つそれを最高度に利用する方法を考えた上で、着手する必要があるということを知れぬも忘れてはならないと云ふことなのである。

それでは吾々がラジオドラマをとりあげて所期の効果をあげて行くにはそれに就いてどのような知識を有する必要があるのか、又それにはどうしたらよいのかという問題に突き當るのであるが、それに就いて考えられることは、ラジオドラマに關する文献を參考にすること、實際

的な經驗を通して學んで行くこと云々の二つである。ところが現在ではラジオドラマに關する専門的な研究文獻が暗夜に星の如き状態であり、然かも實際的な面から學んで行くということも現状ではなから、實行に移し難いことであつてはなから、筆者としても今迄人知れぬ苦勞を経験せねばならなかつたのである。

そこで、筆者としては、地方の演劇団体が筆者の過去に於いて経験した様な苦勞をせずにラジオドラマに於いて所期の効果をあげる爲の參考になればというこゝと、更に一般のラジオドラマ愛好者にラジオドラマに就いての正しい知識を持つて戴き、地方に於けるラジオドラマの普及發展に理解ある盡力をされんことを念願して、この小論を書こうと思ひ立つた次第である。

さて、吾々がラジオドラマを理解しようとするに先づ第一にラジオドラマとは何かという問題即ちラジオドラマの本質に就いて考えて見る必要が起つてくるわけである。

各方面でラジオドラマが研究された結果今日では言葉と音響と音楽とを三つの要素として、一切の視覚的要素をぬきにした純粹の聽覺藝術であると定義される様になつたのである。

以上の様にラジオドラマが考えられた結果、現在ではラジオドラマの本質として次ぎの様な二つの考え方がなされて居るのである。即ち、その一つは言葉と音響と音楽とによつて總てを表現し聽取者の心に訴へてその心の中に眼に見えない心理的影響を描かせ、それによつて聽取者に感銘を與えようとするものであり、他の一つは言葉によつて直接聽取者の心に飛び込んで行くもの、即ち形象を超越して思想とか感情とかいう心理的な世界が、ラジオの有する機械的な技術によつて立体化されて行くものであるとする二つの考え方である。このことは、換言すれば、前者は聽取者に強い感銘を與える爲にはドラマの背後にある情景なり雰囲気なりを絶えず的確に聽取者に理解させて置くことが必要であるということ

とから音を重視する考え方であり、それに對して、後者は美しいリズムに乗つて語られる人間の言葉を主軸としてそれを助けるに音楽と音響とを配し、それによつて表現される一つの世界―それは文學や舞台劇では到底表現の不可能な人間の心理や感情の世界をも含めて―が、直接聽取者の心に感銘を與えるものであるとする考え方である。

現在日本に於いて活躍して居るラジオ作家はそのどちらかに屬して居るわけであるが、前者の代表的なラジオ作家としては「なだれ」「雪」などの傑作を發表して戦後のラジオドラマの世界で顯著な働きを示して居る眞船豊氏があり、後者の代表的な作家としては「遣り」「えり」と共に「なだれ」などの作品を相次いで發表して近來めき／＼と賣出してきた内村直也氏があるが、これらの作家がラジオドラマをどの様に考へて居るかその云うところを聽いて見ることにしよう。

眞船氏は「ラジオドラマは音と言葉との組合せによつてリズムを持たせた音楽

ラジオドラマは此處で改めて論ずるまでもなく、ラジオが發明されたことによつて生れてきたラジオという新しい機械を媒体として表現される極めて新しい演劇の一つの型式であつて、それは舞台劇でも映畫でもなく、ましてや文學でもないものである。ラジオドラマはこれらのものが持つ要素のうちの或る部分がラジオという機械の持つ機能と結び付いて創造された全く別な型式の藝術なのである。従つて、ラジオドラマは舞台劇や映畫とは異つた全く別箇の世界を有すべきものであるからして、視覚と聽覺との両方から吾々に訴へてくる舞台劇を單にラジオという機械を通して耳から聽かせるだけのものであるという考え方は根本的に誤つて居るのである。然し、この考え方はラジオドラマの初期に於いては考えられて居つたことであつて、その爲に初期のラジオドラマに於いては眼で見ることの出來ない視覺影像を解説とか音楽とか音響効果とかで表現しようということに重点が置かれて居つたのであるが、其の後

である」と云い、又「ラジオドラマは音が主役になるべきである。人間というものの、人間の言葉というものを伴奏にして一つの音というものを主役にして芝居を書く、そうすると聽衆に自然のイメージを描かせることが出来る」とも云つて居る。これに對して内村氏は「ラジオドラマの本質が耳から心へ直接通じるものであるならば、それを通じさせる道は何であるか。私は語られる言葉と音楽とであると答へたい」と、そして又同氏は「ラジオドラマの語られる言葉は美しくなければならぬ。動作を伴わないラジオドラマに於いては舞台劇以上にこれは決定的とも云える。」と、ラジオドラマに於ける言葉の重要性を強調して居る。

この兩氏の所説によると、内村氏はラジオドラマの三要素である言葉と音響と音楽とのうちで、語られる言葉が中心となりそれを助けるものとして音響なり音楽なりがあつてそれらの間に音楽的調和が保たれてドラマが進行して行くものである」と云うのに對して、眞船氏は言葉と

同じ程度に音を重視して、言葉と音との完全な融和の下にラジオドラマが構成されて、始めてラジオドラマとしての目的が達せられるものであると云つて居るわけである。この一見相反する様な兩氏の所説も歸するところは同一であつて、寧ろラジオドラマの本質をつくところの二つの大道であるといふべきであるが、唯、この二つの考え方にはそれ／＼吾々として注意しなければならない困難な面があり、それは、吾々がラジオドラマをとりあげる際に充分考慮の上に置く必要のあることである。即ち、眞船氏の所説の如く餘り聴覺を通して描き出される心理的影像を重視し過ぎると、音の形象化という觀念から離れ切れないことになつて必要以上の音を使用することになり、かえつて聴取者にとつては判り難い單なる音の寄せ集めとしか感じられないものとなりがちである。それに對して内村氏の所説の如きドラマを意圖すると、言葉が決定的な價值を持つ關係から、日常吾々が無意識のうちに使用して居る様な言

言葉では到底そのドラマの與える感銘を大にすることは出来ないであつて、必然的に語られる言葉の美しさと云うものが要求されて来るわけである。尤も言葉の美しさと云つても、それが美辭麗句とかお上品な言葉とか云う意味ではなく、魂から迸り出る言葉、音感のよい眞實のこもつた韻律を持つた言葉と云うことではあるが、ともかく吾々の有する貧弱な語彙ではな／＼聴取者に強い感銘を與えることが出来る程の美しいドラマは出来ないのである。上に述べた様な困難がそのいづれにも存在する以上、吾々としては如何なるものをとりあげることが妥當であるかと云う問題が起つて来るのであるが、このことに就いては後述するいろいろの條件を慎重に考慮した上で夫々決定すべきことであると思ふのである。

ラジオドラマがラジオと云う機械を媒体とする藝術である以上、その藝術的效果を大にする爲には、ラジオの有する機械的特性を理解して置くことが欠くことのない出来ぬ條件である。ところが、一般にラジオの持つもう一つの特性と考へられることは、舞台劇が或る特定の雰囲気を持つ場所に於いて演じられるのに對して、ラジオは各家庭と云う單位がそれ／＼別箇の環境に置かれて居るによつて聴取者の意志如何に拘わらず

イッチ一つで自由自在に流れ込んで行くことが出来ることである。このことはラジオの持つ長所であると共に又短所でもあるわけである。と云うのは、舞台劇はそれを見ようとする固定された意志の下に入場料を支拂つて何時間かをそれに割くことを豫め豫定に入れて集つた特定の人達を對象として演じられるものであるから、たとひ、それが予期に反してつまらないものであつても、兎角最後まで観て貰えることと云うことは考慮に入れて置かれるのであるが、ラジオドラマは各家庭に於いて二、三人乃至數人の人達が、絶えず寝起きたり食事をしたりする部屋で、寝ころびながら或は雑談をしながら時には家族全体が眞剣な氣持で聴き入つたりと云う様に、非常に種々雑多な状態で東縛感を感ずることなく極めて浮動的な氣持で聴いて居るわけである。従つてラジオは一時に何千萬と云う多くの人達に聴かれる可能性を持つて居るものではあるが、その反面一度つまらないと聴取者に思われると忽ちスイッチを切

られてしまつて、折角の放送も聴えて貰えないと云う危険性をも多分に持つて居るわけである。然も聴取者との直接感情の交流が行われるわけではなく、更に視覚を欠いて居る關係から、作者なり演出者なりの意圖する情景とか雰囲気とかは聴取者自身の描き得る範囲内で各人の心理的影像によつて變形されてしまひ、その爲に作者なり演出者なりの意圖したことが聴取者に徹底しないことも起つて来るわけである。

以上述べた様なラジオの本質や特性からして、ラジオドラマがとりあげるに適切な素材としてはあくまでもラジオによつてのみしか表現することの出来ない様なオリジナナルな素材を發見すべきであつて、文學や舞台劇のラジオ化と云うことは成可く避けるべきことである。

それでは如何なる素材がラジオドラマに最も適して居るかと云うことであるが、これは筆者にも具體的に説明することはな／＼困難なことであつて、簡單には答えられないが、ともかく一應の概

は急に思い出して途中から聴くと云う様なことが屢々起るからである。(4)語られる言葉の裏の意味によつて回轉して行く感情、換言すれば言葉の内側に於て表現される心理的な遊びの様なものとか、聴覚のみにては容易にニュアンスを感じ得ない様な云う會話によつて人生の断面を扱つたものは成可く避けるべきである。(5)余りに残忍なものとか、陰惨に過ぎるものとか、卑猥な物とも避けるべきである。ラジオの娯樂性、社會性、或は對象が家庭を單位として居ることなどから考えて見て、あらゆる階層あらゆる年齢層が同時に喜んで聴けるものが望ましいのであり、又その様なものでないと聴かれる可能性も非常に減少するからである。

以上の様な制約を考えると、日常のふと心を捉える感激、或は忘れられて居た人間の感情、特殊な環境に置かれた人間の心理言葉で表現される人間の美しさ、美しい空想の世界などと云う日常生活に於いて見られる些細な事柄が案外ラジオドラマの素材として成功する可能性を持つて居る様に考えられるのである。

ラジオドラマに於ける人物配置と云うことも吾々として無視することの出来ない重要な問題なのである。と云うのは、舞台劇や映画の場合には登場人物が多少多くなつてもメーキャップとか扮装とかによつて吾々はすぐに各々の登場人物を識別することが出来るのであるが、聴覚だけによるラジオドラマでは聲以外に何一つとして識別する方法がないのであるから、登場人物が多くなると聴取者にとつてはどの聲が誰であるかと云う聴き分けがつかなくなり、混亂を招くに過ぎないことになるのである。然かもマイクを通して人間の聲と云うものは肉聲よりも一層特徴を少くなくするものであるから、性格を持つた主要人物は出来るだけ少くする必要がある。

それではラジオドラマに於ける最も適當した登場人物は何人位かと云うことで

たとしても、それらの人物が同じ様な年令、同じ様な性格の人間であつたとしても、劇の進行につれて聴取者は次第にそれらの人物を聴き別けることが出来なくなつて来るものであるから、この様な人物だけで會話を進行させると云うことは殆んど不可能なことである。従つて人物の配置は出来る限り對象的な聲の組合せにすべきであつて、例えば老人と青年、男と女といふ様に配置を考慮するといふことがラジオドラマを成功させる爲には不可欠の條件なのである。然しどうしてもこの様な對象的な聲の組合せが構成上不可能なときには、聲の質の余程異つた人間の間で對話させる様にしなければならぬのである。

上述した様に、ラジオドラマに於ける登場人物の數とその配置は、それを成功させるか否かといふことに非常に重要な關係を持つて居るのであるが、同時に耳に識別し得られる輪郭の判然とした登場人物如何によつて左右されるといふことも忘れてならないことである。このこと

は副人物の場合にも同様ではあるが、特に主役の場合には世間一般に通じる類型的人物、即ち聴取者にすぐに認識され心に描き得られるタイプを選ぶことが絶對に必要なのである。

以上の様なことを念頭に置いた上で、明瞭に表現された主題に絶えず主要人物を關係付け、正しく組織立て、行くといふことがラジオドラマを成功させる上に於いて必要なことはいふまでもないことである。

次ぎはラジオドラマ構成上の問題に就いてであるが、それには先づ第一にマイククロホンの驅け回り得る世界は時間的にも空間的にも無限であると云う認識を持つ必要がある。従つて、ラジオドラマを構成するには、舞台劇や映画の如く時間的空間的制約を強要されることがなく、自由自在に組立て、行くことが出来るのであつて、この様を強味を持つたラジオドラマは、舞台を一瞬にして日本から外國の何處かへ移すことも出来るし、現實の世界から空想の世界へ走ることも出来るが、シーモアとマーチンの共著にな

自由に移動出来る」と云うラジオの特性だけに眼をつけ、幾つかの場面を並列してそれをたゞ單なる音楽でつなぐと云う様なことは禁物である。

またラジオドラマに於いては必ずしも全体を現實の會話で構成する必要はないのであつて、ラジオの機能を知悉した上でそれを生かせる限りに於いてはあらゆる型式を用いてドラマを進行させると云うことが寧ろ極めて望ましいことなのであるが、たゞその様な際に特殊な型式を漠然と用いることは、それらの型式が感覺的なものであればある程情景の移り方や會話の運び方に非常な困難を生じて來ると云うことを知つて置く必要がある。要するに感覺的な型式を採用するに當つては、予め作者なり演出者なりがどの程度に現實感を聴取者に與え得るか云うことを充分に考慮する必要があるわけである。

次に情景や雰囲気を取取者に説明しようとして會話が冗漫になつたり、複雑な現實感を克明に入れようとしたりする

ことは、かえつてドラマの効果は稀薄にしふことであるから避けるべきである。この様な場合には解説とか架空の人物を登場させることによつて簡単に然かも興味深く説明させることが望ましいが、これが單に表現技巧や性格描寫の稚拙さをこまかく爲すものであれば避けることが必要である。

音楽を構成要素として使用しないラジオドラマも稀にはあるけれども、それは極めて例外的な場合であつて、大抵のラジオドラマに於いてはそれの與えられる役割が單なる附屬的伴奏的なものではなく、あくまでも言葉と同じく重要な構成部分を占めて居るのである。従つてラジオドラマの作者なり演出者なりは、音楽に就いての或る程度の素養を有すると同時に、その素養を充分に驅使してドラマの構成或は表現上最も適した音楽を指定し、又は選定して使用することを心掛けることが必要である。要するに音楽がラジオドラマに占める地位と云うものは、普通吾々が考へて居る以上に重要なもの

であることを認識すべきである。

音響効果に就いては改めて論ずるまでもない程その重要性がつとに認識されて居るのであるが、然しそれだけに、ともすればラジオドラマの構成上不必要と思はれる音響効果までも使いがちになり、かえつてラジオドラマとしての効果を稀薄にしてしまふことがある、この様な音響効果の使い過ぎと云う傾向は、耳から來る視覚的影像を重要視し過ぎることから眼に見えない情景を音によつて忠實に描き出そうとして、現實に音響を伴うものはどんな音でも入れようと意圖する結果起ることなのである。この様な傾向が初期のラジオドラマに於いては一時可成り重要視された爲に、その反動として音響効果不用論まで飛び出したこともあるが、その後音響効果に對する研究の進展とその技術的進歩によつて、現在では必要となつて集約的に音響効果を用いることが、ラジオドラマの表現上の効果を最高度に高める所以であると考へられる様になつたのである。殊にこのことは下

ドラマが心理的なものであるときに一層重要なことである。

ラジオドラマに用いられる話し言葉は活字でもつて視る言葉と異り、耳で聴いてすぐに理解される言葉であると同時にその言葉は耳に入つて快く美しくなければならぬ。このことは内村氏が云う様な耳から直接心に飛び込んで強い感銘を與えるドラマを意圖する場合には殊に重要なことである。ところが、今日の口語体による日本語と云うものは、本質的に餘り音楽的な美しさは持つて居ないものである。

従つてラジオドラマの言葉としては極めて不利ではあるが、このことが吾々にとつてどうしようもないことである以上、吾々としては充分にこれを認識した上で、音楽なり音響効果なりを適宜に使用して言葉との完全な融和を圖り、構成の上に音楽的な流れとリズムとを持たせる機に工夫して行くことが必要である。それと同時に、現在迄餘り顧られなかつた話し言葉の研究と云うことも、ラジオ

オドラマの發展の爲には不可欠のことであり、今後に於ける重要な課題である。ラジオドラマをとりあげる際に、以上述べたことは欠くことの出来ない基礎的な知識であるが、それと同時に、音の特性なり、マイク・ホンその他の機械的要素に就いて、或る程度の知識なりを有して置くこと云うことは必要と思はれるのである。簡単に觸れて置きたい。

マイク・ホンにはいろいろの種類があり、技術的に云うと、これらは振幅特性とか周波数特性とか或は指向性とかが異なり、それ／＼長所短所を持つて居るのであるが、現在ラジオドラマに主として使用されて居るものはヴェロシティ・マイク・ホンと呼ばれるものであつて、このマイク・ホンの特徴とするところは、音質が軟かいこと、方向性が前面背面とも同じで8の字型に廣がつて居り、眞横からの音は全然吸収しないこと、である。これらの特徴のうちで、方向性と云うことがラジオドラマを演出する上に最も重要なことであり、これに對する理解を深

めることはラジオドラマの立体感を考へる上に於いて必要なことである。

この外、屢々ラジオドラマの特殊な表現の爲に使用されるファイルター・マイク・ホンと呼ばれるものがあるが、これはマイク・ホンに特殊な裝置をしてサイクルを自由に變化させ、それによつて音質を變えて行くものである。このマイク・ホンを使用すると、人間の聲が人間らしくない、地の底か雲の上からでも聴えて來る様な變な聲になつて吾々の耳に聴えて來るのである。

次に重要なことはスタジオの構造である。放送の初期に於いては、スタジオは、一般に内部を音の吸収率の大きいフエルトとか布類で覆い、殆んど反響をなくして、スタジオ内では自分の聲もよく自分の耳に入らない様な構造になつて居たのであるが、その後研究された結果、これではかえつて吾々が直接耳で聞く自然音に近い音が再生されないことが判り、スタジオに或る程度の殘響を與えた方がかえつて放送に眞實性が伴つて來る

と云うことから、現在では各スタジオともそれ／＼の用途に応じていくらかの反響を伸うような装置になつて居るのである。ところがこのスタジオの残響は、前述したような吸音材料の種類や分布状態のみによつて決定されるものではなく、スタジオの大きさ、形態、收容人員の数の数とか配置とかによつても異つて来るのである。

外國に於いてはスタジオをいくつか同時に使用して、そこから流れ出て来る音楽とかセリフとかを後述する調整盤を使用して適當にミックスし、一つの完成されたラジオドラマをつくりあげる所謂複數スタジオ型式と云うものもあるが、日本では現在のところ一つのスタジオの中に必要な数だけのマイクロホンを置いてラジオドラマを行うと云う、所謂單數スタジオ型式がとられて居る。

ラジオドラマが受信機を通して吾々の耳に達する迄には、一般に、マイクロホナー機械―受信機と云う経路を通つてスタジオ内で話して居る人間の聲が何等の人工的な調整を加えられることなくそのまま耳に達する様に考えられて居るが、實際はスタジオに附屬する調整室のガラス窓越しにスタジオの内部を見ながら適當に調整した音を吾々の耳に送つて来るのである。この様に吾々の言葉と音楽とのバランスを適當に調節したり、或は溶暗溶明を行つたりして、混然と融和した総合的音響藝術として流れ出す様にした機械のことを調整盤（コントロールパネル）と云い、これを使用することによつて演出者の意圖のまゝに自由に表現することが出来るのである。この様に吾々には餘り氣の付かない調整盤と云うものがラジオドラマの効果的な表現上からは極めて重要な役目を有して居つて、演出者の意圖する微妙な感覺は、大抵の場合この操作から生れて来るものであると云うことを知つて置く必要がある。

ラジオドラマが受信機を通して吾々の耳に達する迄には、一般に、マイクロホナー機械―受信機と云う経路を通つてス

スタジオ内で話して居る人間の聲が何等の人工的な調整を加えられることなくそのまま耳に達する様に考えられて居るが、實際はスタジオに附屬する調整室のガラス窓越しにスタジオの内部を見ながら適當に調整した音を吾々の耳に送つて来るのである。この様に吾々の言葉と音楽とのバランスを適當に調節したり、或は溶暗溶明を行つたりして、混然と融和した総合的音響藝術として流れ出す様にした機械のことを調整盤（コントロールパネル）と云い、これを使用することによつて演出者の意圖のまゝに自由に表現することが出来るのである。この様に吾々には餘り氣の付かない調整盤と云うものがラジオドラマの効果的な表現上からは極めて重要な役目を有して居つて、演出者の意圖する微妙な感覺は、大抵の場合この操作から生れて来るものであると云うことを知つて置く必要がある。

音の本質に就いて第一に考えられることは、音によつて吾々が知覺することの出来るのは全知覺に對して常に間接的部

分的に過ぎないのであつて、然かもその量は視覺に比較して極めて少量であり、且つ間接的であると云うことである。

第二には音は、その發せられる位置は暗示しても、眼に見えぬ物が有する様な空間的な擴りに相當するものを持つて居ないことである。従つて、音には繪畫に於いて見られる様な重要な位置づけの機能がないのであるから、同時に發せられた數多くの音は、單なる寄せ集めの雜音としか感じられない場合が多いのである。

この様な音の空間的特性から、マイクロホンと人間の耳との差異が考えられるのである。と云うのは、マイクロホンも人間の耳も多數の音が同時に發せられる場合にそれらの音を悉く收受すると云う点では何等の差異も持たないのであるが、然し人間の耳で聴く場合には、その對象に對する注意力の集注によつて或る程度まで主觀的なアングルをつけることは可能である。即ち、音の重要度に應じた區別は、或る程度まで人間の耳ではす

マイクロホンを左右に置き並べたとしても、マイクロホン自体が吾々の兩耳と同様な双聽覺を持たない以上、左右感はいくらかの欠陥を有する。然しこのマイクロホンに於ける左右感の欠陥と云うことは、ラジオドラマの立体的構成上から云つて致命的な欠陥ではない。寧ろ左右感の欠陥の爲に距離の遠近移動などと云うあらゆる手法による音の濃度によつて、あらゆる方向性を聽取者の心像に自由に暗示的に感ぜしめることが出来る可能性を持つて居ると云うことを知つて置くことは、ラジオドラマの演出上極めて重要なことである。

そこで問題になることは、如何なる方法で音源が遠く離れて居るかを聽取者に實感させることが出来るかと云うことであるが、それには先づ第一に、音量は距離の平方に比例して減少すると云う物理的の原則に基づくと云う距離を増して量を減少する手法があり、第二は、増幅器の利用調整による手法、第三には、隔壁等の利用による手法がある。このうち

第一の手法が最も一般的であり利用し得る確實な方法であるが、後述する様にスタジオの大きさによつて制約を受けることは云うまでもないのである。

以上でラジオドラマに就いての一應概念的な説明は終つたわけであるが、次ぎに筆者が過去に於いて経験したいろいろの問題、殊に非常な困難を感じた問題に就いて述べ、ラジオドラマの道を歩める方々の参考に資したいと思ふのである。

先づ第一にラジオドラマを演出して見ると突き當る問題は言葉である。聽取者の耳に快く響く様に語られると云うことはラジオドラマの効果あげる爲に必要なことである。これは前述した様にラジオドラマに於いては極めて重要な要素であると云うことから當然なことであつて、それだけにこの事は地方に於いてラジオドラマをとりあげる場合に慎重に考慮されねばならない事なのである。この土地に生まれてこの土地に育つた吾々にとつてはこの地方獨特のアクセントなり方言

なりが附纏つて離れないと云うことは當然のことであるが、この制約の下に吾々が如何にしたら耳に快く響く様に話せるかと云ふ問題は吾々として充分真剣に考慮しなければならぬことであると思ふのである。

筆者はこの問題の解決方法として次ぎの様な二つの方法を考へて居るものである。一つは積極的にアクセントなり方言なりを生かして行くと言ふ方法、他の一つはアクセントなり方言なりを出来る限り抑制して標準語に成可く近い言葉を使つて行く方法である。現在吾々が聴いて居るラジオドラマの大多數は普通吾々が標準語と考へて居る東京地方の言葉で話されて居るのであるが、このことは必ずしも必要のことではないのである。ラジオドラマの素材のとりあげ方如何によつては、その地方に獨特なアクセントなり方言なりを使つた方が遙かに聴取者の心に眞實感を与えることの出来る場合もあるのであるが、このことは次ぎの様な制約が伴つて居るといふことも併せて考へ

て置く必要があるのである。それはアクセントなり方言なりを生かす爲にとりあげる素材の範囲をその地方だけに限定してしまうと素材が頗る貧弱になつてしまふこと、ラジオの聴かれる範囲は或る一定の廣さを持つて居つてその地方だけに限られない爲にその地方の聴取者には深い感銘を与えることが出来てもその他の地方には判り難い結果與える感銘の度合も頗る稀薄になつてしまふということである。

このことから、その地方に独自の素材をとりあげてそれをその地方だけに限らず廣く聴かせようと思ふには、どうしても標準語又は標準語に近い言葉で話されて然かもその地方の情景なり雰囲気なりを充分に理解させる爲に效果的にその地方のアクセントなり方言なりを使用すると言ふことが必要になつて来るのである。従つてラジオドラマをとりあげる際にはその關係者は一應標準語又は標準語に近い言葉が話せると云うことが不可欠の條件なのである。

この爲にはどうしたらよいのか。理想としては標準語が完全に話せる様に徹底的に訓練することであると筆者も思ふのであるが、現實問題としてこの様なことは不可能なことであるから、次善の策として筆者の考へることは次ぎの様なことである。中央から放送されるラジオドラマに注意すること、日常生活に於いて絶えず相手の話す言葉に注意してそれからアクセントなり方言なりの特異性を發見することに努めること、同時に意識的に標準語に近い言葉を話す様にするのである。このことによつて或る程度までその地方のアクセントなり方言なりは矯正出来ると筆者は考へて居るのである。

次ぎにエロキューションの問題であるが、これは聴覺だけに頼るラジオドラマに於いては舞台劇とは比較にならぬ程極めて重要な問題なのである。ラジオドラマに於いては、舞台劇の場合の様な誇張された話し方でなく、より自然な話し方で然かも眞實感が溢れる様に一言一言に

細心の注意を拂ふことが必要なのである。要するにラジオドラマの話し方は、舞台劇とは異つたラジオドラマ独自の話し方を研究工夫すべきであつて、ラジオドラマと舞台劇との二股をかけること云うことはこのことだけからでも避けるべきことであると筆者は考へて居るのである。

次ぎに問題となるのは音響効果のことであるが、このことで第一に考へられるのは効果用の道具である。地方の放送局に於いては或る程度の道具なり録音盤はあるけれども、その数は限られて居るのであつて、吾々がラジオドラマの構成上必要とする音は何でもつくり出すことが出来ると云うわけには行かないのである。従つて地方に於いてラジオドラマをとりあげる際には、最初から可能な範囲で書を使用すると云う前提の下に構成する必要があるわけである。良い加減な音を使用することは決してラジオドラマの効果を高める所以でないことを知つて置くべきである。

次ぎに録音盤なり効果道具なりは必ずしも必要とする音を正確に表現するものではないと云うこと、寧ろ或る場合には人間の聲の方が遙かに眞實感を持つて聴取者の耳に送られて来ると云うことも知つて置く必要がある。

最後に知覺の件わなない音は、聴取者に理解され難いと云うことから次ぎの様なこととも云われるのである。或る音を表現する場合に、實際にその音を發するものを使用しても必ずその音が表現されるとは限らないのであつて、寧ろ發音体のものに捕われることなく自由に吾々の周囲にあるあらゆるものを利用して、その音に最も近い音を創意工夫する様に絶えず努めるべきである。

音楽に就いてはその場面に最も適したものをその度毎に作曲して演奏することが理想であるが、地方に於いては現實の問題としてその様なことは到底不可能であるから、普通には適當なレコードを選定して使用するわけである。

従つてレコードの選定と云うことが重

要になつて来るのであるが、前述した様にラジオドラマに於ける音楽は、多種多様な場面に使用されるのであるから、演出者としてはそれ／＼の場面に最も適したものを誤なく選ぶと云うことに細心の注意を拂うべきである。又それと同時に、音楽を如何に入れるかと云うこと、例えば背景として流すか、又は低く入れて次第に高めて行くか、或はその逆に入れるかと云う様なこと等、その場面をよく研究した上で最も効果的になる様にすることも大事なことである。

スタジオとマイクロホンの技術的な説明は前述した通りであるが、實際上からは次ぎの様なことを知つて置く必要がある様に思ふのである。スタジオの大きさによつて演出上いろいろの制約を受けること、云うこと、例えば小さいと遠近感の表現などが充分に出来ないこと、云うこと、か使用するマイクロホンの数が限定される關係から表現が思ふ様に行かないこと、云う様なことである。従つて使用するスタジオの大きさを知つて置くことが極めて効果

的に演出することが出来るとも考えられるわけである。それから残響の關係から、スタジオ内でする場合には吾々が普通の室で練習して居る場合と餘程勝手が異なると云うことも知つて居つてよいことである。以上の様なことから實際にラジオドラマを演出する際には、その場所の残響とか大きさとかを充分考慮した上でその場所に最も適した演出の仕方をとることが重要なことになつて來るのである。

マイクロホンに就いて實際的な面で注意すべきことは、大体に於いて地方の放送局でラジオドラマをする場合には前述したヴェロシテイ・マイクロホンのみを使用してするのが普通であるから、そのマイクロホンだけで演出者の意圖するあらゆる表現が可能である様に考慮して置くべきである。殊に特殊な表現上の効果を意圖する場合には、フィルタマイク・ロホンを使用しなくてもそれを使用したと同様な効果をあげられる様に工夫することが必要である。然し一般的に云つて

地方の場合には餘り特殊な効果を狙うと失敗する可能性が大であるから、最初からその様な意圖は棄て、かつた方が無難であり、又ラジオドラマとしての成功する可能性も大きいと筆者は考えて居る次第である。

以上でラジオドラマに就いて理論的實際的な面からの一應の説明は終つたわけであるが、これはあくまでも基本的初歩的な知識であつて、これらの知識を土台として更に理論的にも實際的にも研究を進められて始めてラジオドラマが聴覚藝術としての完成された域まで高められるわけである。もしこの小論がこの地方に於けるラジオドラマの普及發展の爲に幾分かでも貢獻するところがあるならば筆者としても望外の喜である。

(附記)

尚この小論を書くに當つて、理論的な面では南江治郎氏と堀江史朗氏の勞作から、實際的な面では平放送分局長の青田三郎氏と郡山放送局の和田明氏とから幾多の貴重な示唆を與えられたことを記して、これらの

諸氏に厚く感謝の意を表する次第である。
(一九五〇、三、二三)

『白い割烹着』

或る酒場である。

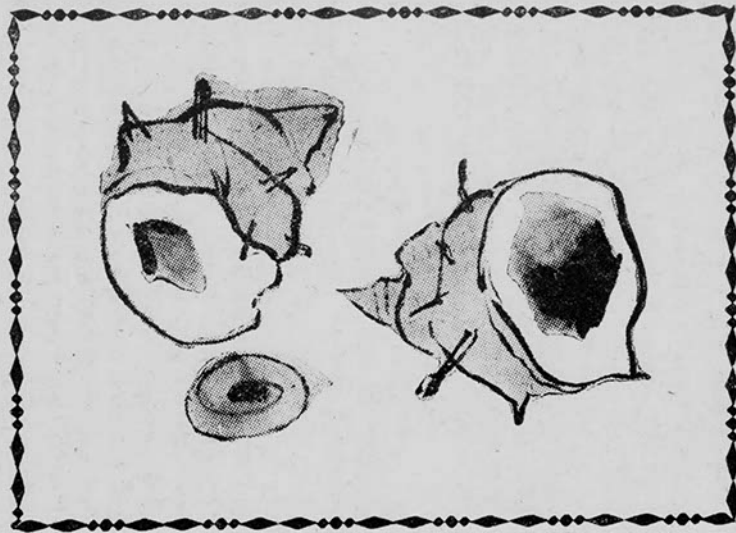
酒、ウイスキー、ブランデー、ジン、バーミント、キユラーツ、ブドー酒、ビールと一通りアルコール仲間が揃つていてつまみものはビールナツ。

二人の女がいる。マダムと女給である。電着がある。二人の女はかわる／＼レコードを變え、客に酌をする。

グラスを手にして考える。どうも酔えないのだ。暫らく考えた。

狭い部屋だ。天井からつるされた櫻まつの提灯が季節感をそとる。

マダムがお酌をしてくれる。白い割烹着が視野の中で身近に動いた。そうだ、判つた。酔えない譯はこゝにあつたのだ。おふくろのかけていた白い割烹着！
(Y・O)



ラヂオドラマ

炭礦に歸る

小室正余志

まさ 四五才 寮の掃除婦
慎一 八才 息子
ふみ 二〇才 寮の炊事婦
平間夫人 六六才 東京から來たお客様
健二 二七才 息子
(効果) 洗濯の音。それにかぶせて、遠くから入替する汽車の響。——洗濯の音續く——。
——間——。

慎一 おつ母あ！、坑口へ遊びに行つてもいいべ？。あぶないとこへ行かないからさア。俺、坑口を見るだけだよ。ね……。おつ母あッたら……。
まさ うるさいね、駄目だつたらだめだよ!!
慎一 でも俺……。
まさ いつまでもさう云つてろ、おつ母あはさかねいでな……。

慎一……………

まさ 性こりもなくさうして木になんか登つて、こなだいたい足なんど折つてもおつ母あ知らねいぞ……………二年生にもなつてもつきわけのねい、坑口坑口つて、坑口なんかその木の上からだつてよく見えるべ、………なにもな、わざわざ危ぶないとこまで行つて見なくともいゝんだよ。おつ母あわな、お前に迄お父さんの様に死んだり怪我してもらつたりしたくないんだ……………

慎一 おれ、死なねいど。
まさ (洗濯の音中止)

まだ云つてゐるのか、……よし／＼そんなにいきたくや坑口でもどこでも勝手に行くといふ、そのかわりな、おまんまも食べさせないし家にも寄せつけないから……………ほんとに性のない子だよこの子は！……………お父つさんはどうして死んだかおめえはよく知つてつべ……………お父つさんの死んだときばつかり坑内には決してはいらねとしやべつて、もう忘れてしまつてつてつかる……………嘆願的に)おつ母ああ氣持も少しは考へてみる、うん。)おめえが死んだらおつ母あはどうなると……………

(—聞—、洗濯の音。)

慎一 だからさ、俺坑内さ決してはいらねど、坑口ならいゝべ？……………おれ、あそこで坑口からトロツコがガアアつてあがつてくるのを見ると、坑内なんかでお父つさん

が慎一！つて呼んでる様な氣がするんだ……………お父つさん、さびしがつてきつとおれを呼んでるんだぜ。

(洗濯の音中止)

まさ 馬鹿なれ！お父つさんがなんで坑内なんかになぞゐるど！

慎一 んでも、お父つさん坑内で死んだんだつて。

まさ これ程云つてもわからねえなら勝手にしろ、そのかわりな、おつ母あもうおめえのことなんかかまつてやらねえから……………お父つさんはな、坑内であんなむこい死にかたをしたんだぞ、梓とトロツコにはさまれて首がもぎれてしまつた。おめえもその眼でよくお父つさんを見つたつべ……………おつ母あはあれ以来炭礦がつくづくいやになつてしまつた、どんなことがあつてもおめえだけは礦夫にしたくねえ、いや礦夫になぞさせませんと死んだお父つさんにはつきりかつたんだぞ。そのこともおめえはよく知つてゐるはづだ。商人にする、小つちやくてもいゝなにか商賣でもさせてえと……………その資本をつくるため、こうしておつ母あは寮の飯たきをしてゐるだぞ！それなのにめえを坑内に入れたら、おつ母あは死んだお父つさんになんて申譯する……………

(—聞—、洗濯の音。)

慎一 だつて、お父つさんの魂は坑内にゐるんだべ！
(Wつて、ふみの近づく足音)

ふみ おばさん、寮長さんが呼んでますよ。

まさ わたしはい。

ふみ え。

まさ さうかい……………

ふみ (洗濯の音中止)

おせんたくね、……………寮生さんの寢巻、私洗つてあげませうか……………まあ、随分さないこと……………

まさ あんまりきたないんでね、いま洗つてやろうと思つてはじめたとこなんだよ……………それはそうと寮長さん、何の用だろうね？

ふみ さあ、なんです？、お前ぢやわからないからおばさんと呼んで来いってホ、……………なにか大切な用件なんぢやない？

まさ おや／＼こんなおばあさんでなきや出来ない用事つてあるのかねハ、……………ちや世話でもお洗濯たのうか。

ふみ いゝわ。

まさ (木の上にむかつて)慎一、おつ母あ一寸事務所へ行つて来るで、坑口へなぞ行つちやいけねいぞ。

慎一 坑内に入らねども死んだらどうする。

まさ なに！(けわしい聲。)

慎一 うそどうぞだ、おれ坑口なんか行かねえから安心しな。

まさ うんとおつ母あをたまげらせろ、いまにばちがあたる

から……………(去る。)

ふみ わるい慎ぢやんね、おつ母さんを馬鹿にしたりしてホ……………(小鳥の聲。……………いゝお天気、小鳥もあんなにたのしそう……………さあ洗つちやうかな。

(洗濯の音、ふみ、それにあはせて何かの曲をハミンングで口ずさむ。)

(—聞—。)

慎一 (急に大きな聲で)お父つさん!!

ふみ あ、びつくりした(洗濯の音中止)
どうしたの急にお父つさんなんて大きな聲を出したりして……………あふないから早くおりなさい。そんな高い木に登つてゐて落ちたらどうする。この間みたいにびつこをひくようになるから。おつ母さんそれこそ心配するぢやないの……………だいいちそんなとこに登つて何を見るのよ？

慎一 坑口を見てるんだよ。お父つさんがね、トロツコに乗つて坑口のとこから慎一つて大きな聲で呼んでゐるんだ。だから俺、いまお父つさんで大きな聲で呼んだのだ。

ふみ だつて慎ぢやんのお父つさんは坑内でなくなつたんでせう……………

慎一 うん。(しおれる。)

ふみ (慎一のしおれたのはつとして)でもきつとお父つ

さん、慎ちゃんのことを心配して坑内から見てるのね、だから慎ちゃんにお父さんの聲がきこえるんだわきつと。慎ちゃんも元気でほんとに良い子になるやうに……。

(一聞、洗濯の音小鳥の聲。)

慎一 (急に) 姉ちゃん、坑内に入つたことある？

ふみ うん。……女はいれないの。

慎一 俺、坑内に入りたいたいな……。

ふみ そんなに入りたいたい？

慎一 あ。……けどおつ母あがおこるんだ。

ふみ それあ、慎ちゃんも小さいから、怪我すると大變だと思つてゐるのよ……。

慎一 姉ちゃん！

ふみ うん、(洗濯のおと中止)

慎一 坑内に入ると怪我する？

ふみ 怪我するつて、——そりや氣をつければ大丈夫よ。この寮に居るみなさんだつてみんな坑内に入つてゐるんだもの。

慎一 ぢや、氣をつければ坑口に行つたつて大丈夫なんだね、俺行つて見ようツと——。

ふみ だめ！ いつちやいけないわ、それこそおつ母さん心配するぢやないの、……あぶない！ 駄目よそんな高い木から飛びおりちや。足折つたらどうするの。……駄目つたら慎ちゃん！……。

ふみ 健吉さんで……あ、この離れの部屋にゐた。いつも慎ちゃんみたいにその窓から坑口を眺めてゐた人……。

(洗濯のおと中止)

まさ ほんとに、さう云へばよく坑口を見てゐたつたね……。

おとなしくていい人だつたが、……もう四年になるね、亡くなつてから……。

ふみ そうか……。それで今朝寮長さん、この部屋を掃除しろなんてわざ／＼云つたんだね。

まさ そうかい、さう云へばこの離れの部屋は昔健吉さんのお父さんが建てた家だつたさうだよ。お母さんがはら

その新しい方の寮が建つた處にあつて、この離れもと

りこわして別に寮を建てる筈だつたんださうだが、終

戦でそのまゝになり、今ぢやこのまゝ寮の一部として使

つてゐるんだつて。いつだつたか寮長さんがそんな事を

云つてゐたつて。

ふみ そう云へば健吉さんもそんなことを云つてゐたことがあつたわ……。お父さんが生きてゐた頃、僕達はこゝで

育つたんだ。この部屋も僕の家でね、まわりもこんなに

家などなくて廣い／＼たんぼだつたんだよ、なんて……

……お父さんでなくてもこの會社の偉い人だつたんだつて

ね。それが坑内で殉職した爲、おつ母さん一人で健吉さ

んと弟さんを教育する爲にこの家をお賣りになつて東京

に出たんですつて。そんなことも云つてゐたつて……。

まさ そうかい。……健吉さんのおつ母さんも随分お氣の毒

な人なんだね。旦那さんを亡くした炭礦で、また息子さ

慎一 へいちやらだい。(飛びおりる音)

ふみ 随分亂暴ね。坑口なんかに行くとおつ母さんに云ひつ

けるから。

慎一 いかないよ！(かけ出すおと)

ふみ ほんとよ……。いつたらおつ母さんに云ひつけるわよ

……。――。

慎一 (遠くから) 云つたつてかまわやい――、

(部屋の中で寮生の吹くハーモニカの音。洗濯のおと

それにかぶさる。――聞――。まさの足おと近づく。)

まさ すまないね、ふみちゃん。忙しかたんぢやないかい？

ふみ うん。今日は日曜だから暇。夕飯の仕度も出来たし

……。それはそうと用事つてなつてたの？

まさ なあにね、二時の汽車で東京から来るお客様を、驛ま

で迎へに行つてもらいたいつて。

ふみ そうだつたの、行つていらつしやい。……寮長さんと

このお客様ね。

まさ うん。ほら、あんたも知つてゐるはずだね。戦争中の

炭礦に報國隊できてた人で、終戦の年の春だつたか、大

きなガス爆發があつたね。あの時亡くなつた健吉さん

！ 平間健吉さんのおつ母さんと弟さんが来るんださう

だよ。

ふみ 健吉さんで……あ、この離れの部屋にゐた。いつも

慎ちゃんみたいにその窓から坑口を眺めてゐた人……。

んもころしてしまつて……。炭礦なんてよく／＼こりた

ろう。運が悪いんだね……。

ふみ ほんとに。……今度はお墓参りにいらつしやつたのか

しら？

まさ そうだらうよ、お二人も亡くしてゐるんだもの……。

それはさうともう何時だらう？

ふみ 間もなく二時になるんじゃない。(汽笛のおと)

ほら二時の汽笛よ。

まさ おや／＼さうだね、こうしちやいられない。ぢや一寸

行つて来るからね、すまないけどあつたのなんだよ。……

慎一！ おや？ どこへ行つたんだらうあの子は、又坑

口へ行つたんぢやないだらうかね……。困つた子だよ、ひ

とがこんなに心配してるのも知らないで、……わたし

や、本當に……。―― 慎一！

ふみ 大丈夫よ。慎ちゃん坑口なんかきつと行かないわ。

まさ いかないかね？ 本當に氣をもませるよあの子は……。

私しやもうトロツコのそばや坑口にあつた子が遊びに行く

のが一番ざわ／＼してね、炭礦はお父さんだけでコリ

／＼。あの子だけはどうしても商人にしたいのさ。

ふみ 小母さんも心配ね。

まさ ほんとに心配が絶えないよ。ぢやたのなんだよ。

ふみ いつてらつしやい。

(遠くから汽車の汽笛。一聞。小鳥の聲。)

であんなむごい死にかたをなさるなんて、……なにしろ突然なだけに、思ひ残すことが澤山あつたでしように……お氣の毒なことをしました。——あれからもう四年になりますね。——今でもこう目をつむると窓の前の健吉さんの姿がジーンと浮んで来ますよ。

夫人 本當にえらいお世話になりました。健吉もあつて死んでしまいましたが、でも、あれも本望だつたでしよう。小さい時から早く炭礦に歸りたいと口ぐせのように云つていたのですから……。

健二 (一聞。)
お母さん、ちよつと裏の方に行つて見ますよ……。どうした坊や、いつてみないか……。

夫人 (去つて行く二人の足おと。——聞——)
こうして歸つて見ると昔住んでいた處は、やつぱりなつかしいもんですね。この家も、私達が住んでいた時とちつとも變らないで……、健吉はこの部屋にゐたのですね。

まさ 古くてもこの部屋が一番いゝつて……。
夫人 そうですか……。あの子もなつかしかつたのでしよう……ちよつとはいらしていただいてもよございますか？

まさ さあどうぞ。なんだつてもらかつていますから……。

(障子のおと。まさの周囲を片付けるげはい。)

夫人 どうぞそのまゝで……。……私達がゐた頃はこの離れがお父さまのお部屋でした……。

まさ そうですか。ほんとに昔住んでいたんですから、なお更懐しいことでしょう。

夫人 この窓ですね、健吉がいつも坐つていたと云ふのは(坐る)……。お、よく坑口が見えますこと……。

まさ お天氣がいゝんでよけいはつきりして……。……研山もあんなに高くなつて、奥様もびつくりしたでしようね……。

夫人 ほんとに……。研山は炭礦の立派な歴史ですね。
まさ おや、あたしつてどうしたことか、すつかり奥さんのおつきになつたことを寮長さんに知らせもしないで。すぐ行つてきますで……。

夫人 どうぞ、私の方から御挨拶に伺ひますから御心配になりませんで……。

まさ でも一寸。
夫人 いえ、ほんとにおかまひになりませんように……。……なんだかこうしてゐると、急に昔にかえつたような氣がして。(坑口の方見て)……。お父さん……。健吉……。……お母さんは只今歸りましたよ……。……長い間さびしかつたでしよう。でもよろこんで下さい。健二があんなに立派になつて、また坑内に入ると云つてゐます。これで。お父さんや健吉のあとをついで親子三代のお勤めが出来ると

す。私はもう嬉しくて……。ほらこんなに涙が出てゐます。……お父さん、健吉も、本當に喜こんでやつて下さい。健二もお父さん達に負けない立派な炭礦人になるでしょう……。

まさ 奥さん！
夫人 おや……。これはとんだぐちになつてしまつて、お笑ひ下さい……。年をとるとつい昔が戀しくなつてね。
まさ 笑ふなんて、私はたゞ、またお坊ちゃんやんが坑内に入るなんて……。奥さんがあんまりみじめで……。

夫人 いゝえ、私は今、本當に幸福なんです。……お父さんをこの炭礦で亡くし、大きな子供もこの炭礦で死なしてしまひました。小さな子供もまたこの炭礦にお世話になろうとしてゐます。でも、私はそれでよいと思つてゐるのです。それがお父さんや、子供達の望であるなら……。

まさ そのことのために私が苦勞したとしても、そのために私がみんなの犠牲になつたとは思へないと思ふのです。……私は幸福です。……お父さんや、健吉のそばに歸つて来たんですもの。

まさ 奥さん！
夫人 お父さんも、健吉もよろこんでゐますよ。
夫人 (一聞。急ぎ足で歸つて来る健二、慎一の足おと。)

健二 お母さん！ ほら、この臭だ！ この臭ですよ。僕がどうしても忘れることの出来なかつたのは……。坑内の

臭だ！ 坑内の臭なんです。ほら、小さい頃坑内から歸つて来たお父さんの臭とおんなじなんです。かびたような、それでゐてあますすばい乳の臭。作業衣を着たお父さんの臭なんだ……。……僕は、僕もさこの作業衣を着るんですよお母さん……。……親父や兄貴に負けないようにしつかりやりますよ……。

健二 おおさん、坑内に入るの？
健一 あ、おちさん坑内に入つてうんとやるぞ！
健二 俺も入りたいな。
健一 大きくなつたらはいさ。どうだい坊や、おちさんと一緒に、ほら、あそここの坑口に行つてみようか。

健一 うん……。でもおつ母あに叱られるもん……。……
健一 ！いつてもい……。……おつ母あもう叱らねえと、早く行つてお父つさんの名を呼んでこい。ドペラの中にしみこむように呼ぶんだと！

健一 ほんとと！
健一 ほんとと！
健一 あ、おれ、大きな聲でお父つさんと呼んでくるぜ！
健一 ……お父つさん！…… (駆け出すおと)

健一 ！大きな聲で呼ぶんだと！
健一 (遠くから慎一の「お父つさん」と呼ぶ聲。)

夫人 本當によいお子さんですね。
夫人 (ゆつくりと入替する汽車のおと。遠くから再び慎一の「お父つさん」と呼ぶ聲。)

慎一 ！大きな聲で呼ぶんだと！
(汽車のおと次第に遠くなる)

(終り)

玩具を買ふ

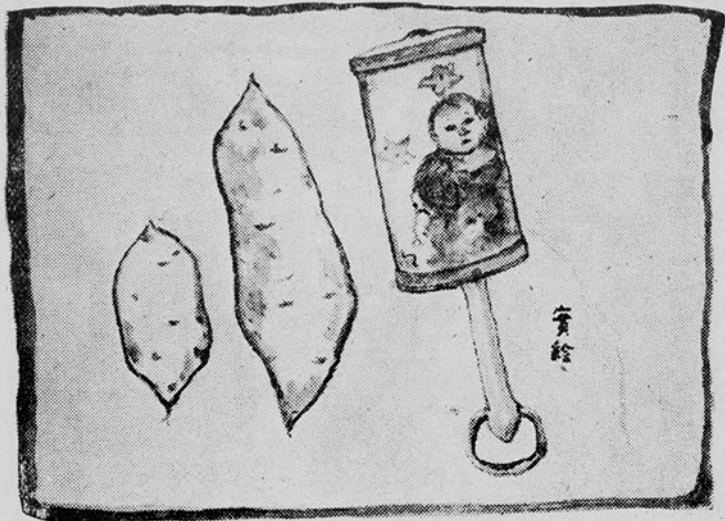
草野正辰

手拭ひを姉さんかぶりにした子やばらりと兩わきにたらし
たのも居る。六月のむんむんする午近い日射しが校舎の入口
近くで群がって草をむしつてゐる女の生徒達に短かい影を作
つてゐる。

高等科を卒業して炭礦の青年學校へ彼等は就職した。この
子達のたくましい生活力は勉強しながら賃金を貰ふのではな
く、賃金をもらつて勉強をしない型に屬する。頭や目を動か
すことよりも体を使ひたいのである。

自動車學校風の校舎は明彩のためにコルタールを浴びて
小ぎたなく横にのび、その後ろは崖になつて炭礦地帯らしい
ゆるやかにうねる丘陵になつてゐた。

八田は獨りぼつねんと生徒達からはなれて、まばらに生え
た雑草を引抜いてゐた。睡眠不足のかい目まひを覺えなが
ら、細かい雑草のしつこい生命を破壊してゆく自分の手を眺
めたり、そして自分の手に引抜かれた雑草のはそい根が白い
神經のかたまりのやうに思はれて、その間からしつとりしめ
つた黒い土がコ、アのやうにかわいた大地の上にこぼれる感



觸を樂しんだり、近くの選炭場から聞えて來るものうい音響
に心引かれたり、中にぼんやり機械的に腰を少しづつづらし
て作業の中にとけこんでゐた。

「八田先生が見てつからやめなつてば」

「何よ、八田おん坊なんかおつかなくない」

「この前ふるへて泣いたのは誰れだよ」

八田はそのヒソヒソ云つてちやつとこつちを見た風な背後
の雰圍氣に、少し作業がだらけて來たなと氣づいて立上つ
た。二三人づゝかたまつては草をむしつてゐるあたりへ近づ
いてゆくと、愕ろいてふたをあらはてゝとぢてしまふしゝみ貝
の様に沈黙するグループもあつた。白眼がちの大きな目でち
ろりと見上げて側の者と急に競争する風に忙しげに手を動か
す者も居た。

「十五分間休憩する。」八田の聲が響く。とバタ／＼便所の方
にかけてゆく者や日影に固肥りのふくらみかけた腰をよつこ
いしよとおろす者もあつた。五十人からの思春期の小女達な
のに、みんな芋蟲の様にころころしてモンペをはいた足は一
様にすんぐりと短い。肩に肉がついても胸のあたりはべちや
んとしたものである。この連中でも職場にゆけば待つてまし
たとばかり何んだかだと教育されあぶら切つていやらしくな
るのだろう。

八田は考へるともなしに日影にそれでも列んでゐる羊の群
みtainな生徒の間を大またで歩いて水呑場へ急いだ。

お落酒な水谷トミと大柄な山田芳子がしんねり手拭ひで顔を
ぬぐつてゐた。

八田が無作法な飲み方で水道の蛇口へ口をつけてゴクゴク
やつてゐると、水谷と山田の兩人はさつと八田をはさむ様に
して教師の眞似をしはじめた。水谷のすべつこい靜脈のすけ
た首すじへ、コロ／＼と水滴がころがつて甘い髪と汗の匂ひ
が鼻を打つ。

「こちら、行儀が悪いぞ」

ぐすつと笑つた兩人は

「先生だつて行儀わるい」

「ねえ」

「俺のやうな老人はよろしい。君達のような美人は行儀をよ
くするものだ。第一口をとんがらかして水道口へくひついで
ゐるのは、ヤマタの大蛇みたいで感心せん。」

「三十才のおじいさあんないよネ。アツハツはあ」水谷が水
にむせてせきこむと山田は「先生の奥さんはこんなしねえべ
よ、俺らはこうして水のむとうまいんだよ。先生だつてうま
いべよ。」ニヤニヤしながら媚のある目付をする。

「それや俺だつて旨い。しかしお行儀は悪い。お嫁の貰ひ
手がなくなるぞ、今に學校にお姑さんが來て、山田芳子つち
ゆうのはえゝ子ですかつて聞く。俺が、ハイいゝ子です。だ
が八岐の大蛇みたいにすこく水を呑みます。」と云ふよ」
「そんな婆婆あ、ぶんなぐつてやる。ふあつはつは」山田の

たくましい指太の大きな手が八田をばたりとたいて、水谷とさつと逃げて行つた。腹の底からの原始的な哄笑を眞青な空と校舎の壁にひびかせながら。それでも若い乙女の甘やかさをこめてひびいた。

八田は腰の手拭をとつてゴシ／＼顔を洗ひきつぱりした顔でぶら／＼と引返して行つた。八田の用事のすむのを待ちかまへてゐた風に七、八人が水谷場、洗面所の方へすれ違つた生徒達と一緒にまいた野菜の種が最早すつかり伸びて一面の立派な畠になつてゐた。山東菜に一杯の陽があたつて、輝くようなエメラルド色。校舎の日影に身体が入ると八田は急に再び睡眠不足の目まひが襲つてきた。

腕時計を昨今めつきり瘦せた腕にのぞくと十五分を一分過ぎてゐる。

「作業始め」を呼ぶや、再びぞろ／＼と穴からはひ出る蟻のように生徒達が草むしりにとりかゝつたが、さつき抜いた草のうちにはしはれて白く水氣を失つてしまつたのもあるのに、大部分はつや／＼とした雑草の強靱な緑のてりをとめてゐた。八田は少し顔をしかめて腰をかきめ黙然と草をむしり始めた。學生時代疲れると裸足になつて庭へ出ては草をむしつたものだつた。八田が満たされぬ優越感を軍隊でもてあましながら阿呆の如くに物干場監視とか既當番とか草むしりをくりかへして、九三年間の軍隊生活が終つた。満期除隊になり悪夢をはふり落したいと思ふ間もなく、微用逃れにこ

の炭礦へもぐり込んだ。丁度初代の基督教徒がローマ帝國の迫害をのがれる爲に薄暗いカタコンバにもぐつたり、各地に散らされてデラスボーラと呼ばれる人達となつたように、八田光太郎はうすたない戦争の谷間をへ賢しくも逃げかくれたのであつた。八田の前職は牧師であり、牧師となり得ぬ自分の性格の卑怯さを軍隊で見せつけられ、分裂して同時に一つの事柄を三通りに考へながら行動に於ては手も足も出ぬもとかしさを充分に味つたのだ。

生きてゐることが極めて無意味と悟りながら、入隊前に婚約した女性を娶り、終戦を迎へて子供の父親となつた。にがい動きのとれない果てぬ悪夢を夢見続けようとするような嗜虐的な日々であつた。しかも表面ではさりげなく、動いてゐるやうにとめてゐたから、外目にはそれ程の深い裂目が覆はれてゐようとはうかゞひ知る由もなく、現れたところはつるんとした兵隊上り以外の何ものでもなかつた。

八田は終戦後の半年程は日夜小説を書くことに腐心してゐた。天分のない一通り小器用にまとも上がつてしまふ作品にあきたりなく、夜は十二時から二時頃迄社宅の二疊の部屋にこもつてものを書きちらし、近頃は收戦前後に書いてゐた日記をまとめて「南京豆」という題の小説にとりかゝつてゐた。しかも心の底では何をくだらない虚栄と無駄とをくり返すのかという聲がブツ／＼いふてゐるのだつた。

空の空、空の空なるかな全て空なり。日の下に人の勞して

爲すところのよろ／＼の働きはその身に何の益かあらん。こ

んな聲が八田の坐つてゐる二疊の窓硝子に、夜更けや夜の明けやすい近頃は、ぼんやりひびいてくることがあつた。やめようか。やめてしまへ。自問自答のうちに八田のギョロリとした目は、ゲタ／＼笑ひこけてゐる山田と水谷が中心となつた一團を真近に認めた。

うつそりと立上つた八田は、山田の五六歩手前の雑草のかなり生えてゐる邊へ行つてしやがんだ。生徒達の前の方は女らしい綺麗な丹念にむしられてゐた。山田の出目の瞳は眞白に澄んで大きなくましい口は赤くひきしまり大粒の齒が唾液に濡れて光つてゐる。ちまれがかつたゆたかな髪を手拭できりつとしばつて、あらひざらしの半袖のシャツから肌黒い太い兩腕がこわい生毛を見せて、飛白のモンペの膝がしらの邊りを忙しげに動いてゐた。水谷がいたづらはく目尻を下げて色白の丸顔をにやつとさせて山田を見た。

山田は支柱夫の娘で水谷の家は床屋をやつてゐる。この學校の生徒等の家はみんな炭礦で生活してゐるのだ。

「先生ねえ、バクツでマンマ炊いてる家があんだつてよお。」
輕蔑の極に値ひするかの如き口のまげようで、水谷が耳よりな話だから御注進といった表情をする。

「ふうん、バクツでか、一体親父さんは隣人かい。」
「坑内だよ。先生。金持ちだつたんだよ。んでもその家の母ちやね。何んでもみんな賣つちまつて、サツマイモ買つて

食つちまうんだよ。周囲の生徒達は笑つた。

山田はあく迄もこの非道な極悪女性を身近に眺め知つてゐて、親しく事柄をわきまえてゐる得意さを、長目な舌に乗せて早口だつた。

「ふうん。飯釜は賣つちまつたのかい。」

と八田は異様な好奇心にかられて來るのだつた。

「そだよ。飯釜も蒲團も蚊帳も鍋も、みんな賣つちまふんだよ。賣つてみんなイモ食つちまふんだよ、作業服だの地下足袋だの配給になつて。社外に持つてつて皆賣つちまふんだよ。その父ちゃん五月にチビスになつたつて。氣の毒がつてな、父ちゃんに甘請でも買つてやんなと二十圓呉つちやひとあつたべ。母ちゃん錢受取つて、いも屋で二十圓いも買つてベロ／＼一人で食つちまふんだよ。」

「山田、その家子供何人ある？」

「三人だ、一番上は俺等と同級だから十六だつてえ。」

蒲團、綿出てばろ／＼だつて。避病院に行く時な、蒲團かけねで、蒲團包む大つき風呂敷のボロな、あれかけて行つたんだよ。冬な、蒲團ねえもんで、あろりさ、火い焚いて、皆子供等も坐つてあつたつてんだよ。蒲團ねえんだも、寝られねべよ。ねえ。」

「おやちは坑内稼いだもの、収入は相當ある譯だろう。」

「んだよ。チビスの時、その母ちゃん、糧のうんと入つたボロ／＼の、かちめのゴチャゴチャ入つた飯くつちやんだと

よ。父ちゃんに。

父ちゃん、食はねつて云つたんだと。そしたら、隣の人食はれるようにこせえてやれつてゆつたら、んでも父ちゃん食ひたくねつて云ふんだから、え、べつて云ふんだと。母ちゃんがよ。おらあきれてしまつたよ。ふんと、だらしねんだよ。」

山田の大きさに誇張した表情につられたやうに、小柄な松本が

「な、お前、お前、誰の母ちゃん。泉さんの。うへえ」

目をむいた無邪氣な嘆聲に八田も笑つた。

山田は益々調子に乗つた。

「あのリットルバケツあつて。あいづでマンマ炊ぐんだよ。んだから底まつくろけ。」

バケツ一つしかねえんだから。水でも何でも水道さくみにくつて。おらの長屋あたりの井戸端會議はこの話で大評判。毎日つづくのさあ。ねえ、バケツで飯たくなつておかしくてだらしね、ねえ。」

生徒らの屈たくな柔らかな唇は大きく開いて、自分達と同胞のゆがんだ常識でわりきれない行動をば野性の花のやうに笑つた。八田は第一次大戦後のドイツのインフレに似た模型の中でも、もはややうした奇形な出来事が生れたのだらうかと思つた。

この風變りな母親が例へ誇張されたにしてもよく知つてゐる

た。そして昨日の出来事をあらためて思ひ浮べて見るのだつた。

おそい夕餉の食卓に向つた折、貧しい膳の上をつつきながら、八田の細君はつぎのあたつたモンペズボンに目を落して、急に思ひ切つたやうに、

「あなた、もう今月どれ程本を買ひなすつたの」

「さうだなあ。雑誌が九冊に、單行本が五冊位だ。全部で百二三拾圓だらう。」

「今日まだ七日よ。月給日まで十八日もあんのにい。もう駄目ですネ。そりや勉強なさるんだから本は必要でしょ。だけれど、もう少し考へて下さらなくちやあ。今日悲しくなつちやつたわ。額を抱いて外に居たら川島さんの奥さん、正夫ちゃんにガラガラ持たせて來たの。奥さんね。額ちゃんに借してあげなつて持たしてくれたの。後でお返しする時困つちやつたわ。額ごつしりガラガラ握つてはなさないんですもの。うちの額は十八日も正夫ちゃんより早く生れたのに。川島さんの坊やちゃんもチャンとガラガラ買つていたさうい。」

「さうか。お前、リーダースタディエスト讀んだかい。」

「えい。」

「あれ面白いだらう。あ、云ふのをどんどん讀むことだね。これからどしどし暇をつくつて勉強しなくちや駄目だぜ。」

昔どつたきねづかの教訓的面持と先生口調で、自分の讀み

る身近かに現れて、別に戦災にあつた譯でもない家庭人なのだ。八田にとつて、これはごくありふれた奇妙な人間の心理のうらがへしに過ぎない。たゞ單純な情熱の燃焼に過ぎないのではないかと思はれた。藝術も學問も經濟も權力も、金びかで莊嚴らしくもつともらしく見せかけてはゐるが、所詮はサツマイモを食つた炭礦長屋のお内儀さんの情熱の現れとどこに異な点があらう。

一家の經濟を司る財布を握つた山の神が、亭主の坑内に入つて働いてゐる間留守に所在なきのため寂しく、小腹もへり甘味にかつえ、虚榮もあり、冬越しのさつまいものその味を覚え、一向に悶え苦しむこともなく、さつまいもの四本入つた一皿十圓の買食ひを平氣で日に三度も行へば、如何に請負ひ仕事の、割の好い、坑内の荒稼ぎでも、配給物だけでは毎日平均拾五圓はあらうといふ敗戦一年目近い昨今では、忽ち家計はゆらいで來るのは當り前のことだ。例へば、寢床でも長屋には屋根もあり押入れもある。一ヶ月六十錢の家賃に四十錢の電燈料、風呂へは朝五時から夜十時まで何度入つても只である毎日だけれど、一日三十圓、五十圓のイモの買食ひでは、家財道具の中で賣れるものは何でも賣らなければならぬやうになる譯だ。

人間には一つのを得ようとする時に、他のものを強いて犠牲にして喜ぶ傾向がある上に、犠牲になつて喜ぶ者もあるのだ。八田は公休日の前日の晩の妻との對話を思ひ出し

かすをば、妻のガラガラに廻してやる。八田にとつて目下の熱情は本を讀むことにあつた。戦争中の燈火管制、出版統制に押えられてゐた文藝的なものに對する缺乏感のせきを切つた奔流に似てどうにもおさえようがなかつた。長屋のおかみさんがバケツで飯を炊くやうになるまで、ふかした一皿のさつまいもに慕ひこがれ、萬事を投擲しても悔ひないのと同じやうな熱情を本を買ひ求めることに注いで八田は最上の悅樂を覺えるのだ。

炭礦から一里半程離れたところに平市があるのだが、八田は汽車の切符を手に入れる爲に行列の中に立ち變り、もはや汽車の時間のないのに氣を揉み走り、ろくに知りもせぬ驛員の親切心に甘えて切符を手にし本を買ふ目的で汽車に乗込むのである。闇屋の不精ひげや大きな荷物の中にはさまれ、戦争を生延びた吐息に、あはやインフレの波に溺れようとする吐息を交へるのだつた。

都會のよいことには學校關係では民主主義の名稱で新らしい教育が始められてゐた。圖書室には備ふべき本があまりに多く、入手出來得る量は極めて少なかつた。書庫を占めてゐた大部分の戦時出版は、敗戦の虚脱の中に焼きたてられてしまつてゐた。教課書などある筈もなかつた。小學校の教課書すらほとんど政府では手がまわらなかつたのだ。あの強力な戦争中の戦争協力が手のひらをかへす豹變振りだ。百八拾度の回轉。しかも同一の人間が丸で正反對のことを教へ語るの

である。

しかし八田などは明るい電燈の障子を明け放つた部屋に見上げる時、希望の喜びとは別なほつとした解放の安緒を覚えるのであつた。それでも半月の間に五百圓の新田生活から五拾七圓二十五錢とか、十三圓五拾錢とか、十九圓七十五錢とかをその都度本屋に現金で支拂つてしまへば、まさか台所から飯釜を賣りにかつぎ出すまでにゆかなくとも、勿論一升炊きの土釜なのだから賣れを管もないのだが、「あらあら、もうお金ないわよ。金融通帳に封鎖の残りいくらかあつたかしら。あれ金融通帳ないわ。え、と。あ、あつた。あつたわ。」こんな妻の起居や叫ぶに近い言葉を見聞きするのであつた。

それにつけても妻のひかえ目にいふ子供の玩具の話とは、何か八田の胸にひびいた。自分の子供がもたずに近所の子供がもつてゐるガラガラに妙にこだわつた。親馬鹿などといふ反省も起らないで、妙な空虚さが体も吹きぬけるように思つた。その時平驛頭の青空市場にならべられてゐるガラガラの色が急に眼に浮んで来た。白ちやけた南爪の黄色そつくりのセルロイドで、中に小石が入つてゐて不様な音のする文字通りの粗悪なガラガラだつた。八田は露店の前にしゃがんで、ガラガラを振つてゐた自分の姿を思ひ起すことが出来たし、二圓五拾錢といふ値段も覚えて居た。そして根つからの素人くさいそして抜け目なく露店にすはつてゐた慈深相な男の眼付きをも思ひ出した。

「もう少しすればもつとまじなのが出て来るから、そしたら買ふことにしよう。」

といふ喉まで出かゝつた言葉をのみこむようにして八田は二疊の書齋に引込み、乏しい財布のうちから買ひ求めた本のなかに身をうづめた。ザラ紙をとちた安手な本ばかりであつたが、それでも長屋の内儀さんのさつまいもよりも、八田の細君の欲しがるガラガラの山よりも遙かに八田にとつては香り高い情熱のハケ口としか思はれないのであつた。つい二、三日たつてそれから降りつゞいた霧が晴れると六月のちりつと暑い昨日となつた。

雨のために出遊つてゐた八田は、午前中男女一年生の授業を氣持よく切上げると、地方事務所の教育課への用事を片附けようと決めた。

肥つた鈴木校長と永年縣立女學校の數學の教師をつとめたといふ渡邊先生。洋裁を主として教へてゐる花森つや先生、それに給仕の三瓶ミヤ子が常勤で、他に男女夫々二人の囑託があつたが、今日は一年生のみの登校日に當つてゐた。二年、三年、四年の生徒等は週二回午後だけ職場から登校することになつて居た。鈴木校長や渡邊先生は終戦一ヶ年程はかなりの動搖らしいものも見えたが、八田から見れば人生の進路を見極めてゆるがず泰然として出勤簿に印を捺し續けてゐるとしか見えなかつた。

晝食をすまし雜糞ヘアルミの辨當箱を仕舞ひ終ると、八田

は虎杖の葉をまぜた煙草を吸ひ始めた。彼の煙草の吸ひ振りはさもいやらしきうにきたならしく見えた。

「八田さん。地方事務所の教育課への届け、あれやつて下さつた。」めつたに自分から口を開かぬ校長が、妻楊子を丹念に使ひながら肥つた襟元をのぞかせてきた。

「書類はすつかり出来てますから、午後から私の授業もありませんし、今日平へ行つてすませて來ます。」

「そう。ではお願ひします。一年の女は洋裁と音楽でしたね。男の方は作文。作業。渡邊先生作業は何です。何んでしたら教室内外の掃除を八田さんと出掛ける前に打合せしてやつてみて下さい。私は十二時半から鹽業所で會議があるのを出掛けます。大分暑くなりましたね。背が低い丈あつて姿勢の好い校長は、飲みかけのお茶の残りをぐいと呑み干すと、ではと腰をあげた。給仕であつて一年生の女生徒でもある三瓶は校長の靴をそろへる爲に玄關へ走つた。背の高い花森先生は獨身らしい身ごなしで玄關へ立つた。いつてらつしやいませ。三瓶、僕のカバンは家の方へ歸りに届けてくれよ。校長特有の甲高い聲が聞えて砂利をふんで行くおとが遠のいて行つた。

渡邊先生と八田は黙つて教員室の窓からうつそり外を眺めてゐた。八田は電話をとりあげて驛のすぐ近い職場に居る生徒を呼び出した。そして平までの切符を買つておくようにたのんだ。

「一時二分で行くから。頼むよ。」

「はい。何枚？」

「一枚でいいよ。」

「なあんだ、二枚も三枚も思つて心配したの。一枚なら買つておきます。」

三年生の菅スミ子の聲は熱はくてもかすれてゐる魅力があつた。そしてこゝろいふ手もあることにやうやく今氣のついたこれ迄の自分のうかつ振りがおかしかつた。

「渡邊先生、僕は出掛けますが、よろしくお願ひします。」

「全く。暑いのにごくらう様です。」胡麻鹽頭のこの四十を越した渡邊先生は全くの東北人で、喜怒哀樂の表情に乏しい、自分を語らぬ頑くなさや臆病さや小心の眼の動きを見せる。長い教員生活で鍛えあげられた處生術と鑑をば片時も忘れずに身につけた感じがする。教室で自己陶醉にふけつてゐるような授業振子を見るにつけ、自分自身に感ずるにつけ、會社員でありながら教員であつて、生徒等から先生と呼ばれてゐる變挺子に、八田はいつも先生と云はれる程の馬鹿者よと自嘲するのであつた。

花森先生と三瓶は宿直室で何やら歌つてゐた。校長の留守になつた晝休みはすつかり長閑になつて、疊の上にごろんと大の字に横になつたような風景を連想させた。

八田はやつと生えそつた髪にくしを入れ玄關前のヒマラヤ杉の下にたつた。

空はキラキラ白い微粒子を一杯に紺壁の中うちに舞き散らして光つてゐた。向ひの山はきらめく緑の葉うらをかへしていつせいに風になびいてゐた。あの邊はつい先頃まで眞白に梨の花を一面に咲かしてゐた目を投げる邊も一面の緑であつた。

雑糞を肩にふらふらさせて線路つたひに驛の方へ歩いてゆくと、専用線の向ふの田圃に、田に、しでも取つてゐるのであらうか、動いてゐた。

コンクリート建の軽く明るい驛近く輸送係の結所の前へ出ると、八田の近づくのをどこから覗いてでも居つたかのやうに、かすれがかつたらうら若い聲と共に、ぶくんとくびれた二重顎に笑ひを一杯匂はせて菅スミ子が現れた。

「先生。先程は、ハイ往復は切符賣らないの。平へは学校の御用事で？」

「そう。どうも有難う。」

八田は切符を受取つて五拾錢渡した。「忙がしいのかい」

「いゝえ。暇。貨車廻りが悪いから。先生ね。今度の登校の時あのお話してね。ジャンバルジャンの續き。」

「俺のところにその本あるから。それ讀めよ。何だかもう俺の話はくたびれちやつて駄目だ。それにすぐに居眠りを始めるのは誰だつて。」

「しかあし。眠んのはおらでねえで。先生。あらつ。あたしほんとにジャンバルジャンのお話好きよ。」

「おらだの、あたしだのつて結構忙しいんぢやないか。ぢやいつてくる。ありがとう」

「先生、おつり。」

「いゝよ。いゝよ。この次の時も頼むつもりなんだから。いゝんだよ。」

別れて棧橋をのぼると改札が始まつてゐた。乗者の誰の手を見ても背中を見ても、可成りの荷物があつた。輸送運搬人があまりにも多すぎるのだ。最近の停車場は貨車廻りが悪いので忙し過ぎるのだ。石炭と人間との對比が奇妙なので、ニヤニヤしながら列車に乘込んだが、上下からまるで壓迫されるやうな殺人的な混雑が八田にとにかく安全に身を保ちながら生きつづけなければならぬ本能を直ちに押しつけてきた。顔をゆがめ、足の立つ地点をさがし、手をつつばらなければ、八田は倒れ、混雑の波底に沈んでゆくように思はれてならなかつた。見も知らぬ異郷の旅の空で故なき拷問をうけてゐる感を覺えたが、八田は背の高い頭の中に敗戦の混亂の意味を何やら改めて思ひ返すだけであつた。しかも本能の増増のなかの自分自身の當惑さを周囲の男女から發する臭氣や壓力に無意識に押しつけ、自分だけは獨り正しく存在してゐるかの如く思ひ、さも特別製の人間だと思ひ込んでゆくのであつた。平驛頭から吐き出される東北人の群は、うす汚れた十圓札のようにもみくしやになつてばら撒れて行つた。驛前の空はむんとする廣場の熱氣の上にさまじな騒音をこめて擴がつ

てゐた。八田は放心状態で丸トモの角を折れ、本町通りを地方事務所の方へ歩いて行つた。
乏しい物資を並べた商店の中にはそれでも百姓らしい戦後の百姓がちらちら動いてゐた。配給所の前には小便をこらへてゐるやうな表情の細君や女房達ならんでゐた。

地方事務所の前には盜難豫防のため靴はなかもちこんで下さいと揭示してあつた。すぐに書類の提出をおはつて表へ出ると小學生が櫻の木に登つて遊んでゐるのが見えた。ふみつぶされた毛蟲が緑色の汁を出して道に死んで居た。青い田圃の眞直な道をビカビカの自轉車に乗つた若い衆が走つて行つた。どろんとした静かさのなかで八田は財布に六十圓ばかり金があるのを考へて、南町の不揃ひな屋並の街へ出た。

ゆきつけの本屋へ入ると以前から眺めつづけてゐる本の間に新刊のジャンソンの四つの要素がある。内田百閒の丘の橋がある。浦上切支丹史があり、高村光太郎の道程改訂版が目につく。饗宴の創刊號も出てゐる。眞新らしい白木の本棚の上に豊かな内容を貧しい衣裳に身を包んだやうな人物を思はせて、著書が夫々に己の存在を主張してゐる風だつた。眼鏡をかけた不精ひげの本屋の親父は白眼の多い細い目でテラと八田に視線が會ふと、奥へ入つてとつて置いてくれた〇〇文學を持つてきて手渡ししてくれた。八田は餘程塾中生や塾女生のこみ合つてゐる背後から本棚の浦上へ手を出して、切支丹史を買はうかといふ氣になる。定價四十八圓だから一割増し

の賣價で五十二圓八拾錢になるなと胸算用をして、丘の橋なら調度手頃だなと思つては見たが、不意に地方事務所へも一つ用事を足してくるのを忘れたことに氣がついた。いづれその用事を片附けての上でとあはて、雑誌代を支拂つて、思切り悪く店を出た。穴のそちこちにゐいた舗装道路の上は午さがりの射差しにカツと熱してゐる、上衣を着て、汗ばむばかり。八田は大通りの眞中で上衣を脱いで小わきにかゝえ、街の人通りを抜けてゆくと玩具屋の方をのぞくと誰も居ないやうだ。よく見ると赤いガラガラが澤山ぶら下つて飾つてゐる。少し質がよいやうだなとなかへ入つてゆくと、明るい戸外から急に室内に入つた爲に馬鹿に店内が眞暗く感じられる。あかるい淡紅色のセルロイドをはつたガラガラには可愛い赤ん坊の笑顔がかいてある。人の氣配にふりむくと將校服に乗馬ズボンのいかつい目の男がうつそり立つてゐた。身内のすくむやうな目付きで眺めてゐる。

「このガラガラいくら？」

「十四圓。」
ぶつ切ら棒な返事で買へるものなら買つて見ないといふ態度だ。八田は物も云はすさつさと店を出ながら丘の橋と同等だと思つた。時計を見ると汽車の時間まで後一時間ある。急いで地方事務所へ引返す、用事を片附けながら部屋の柱時計の進み方を氣にしてやつと二十分までやり過ぎた。歸り途は

駢足で驛前に着き、何はともあれ歸りの切符を行列の後に並び汗をふきふき手に入れた。安心と同時に三十分の餘裕がある。ガラガラを子供に買ふか、丘の橋なる本を買ふか、書籍か玩具か。父親と娘といつても赤子に過ぎないが、結局どちらかの玩具を選ばねばならない。先日細君の話もあり兩方買ふことは今は許されない。いづれか *one or the other* である。 *not to be* 海なす艱難が押し寄せる。空腹なハムレットが腹一杯のサンチヨのやうな思案を始める。驛頭には人が群れ郡山、仙台、上野方面へ夫々の目的と悲しみ喜びを襟元やボタンでつくんで、沈黙したりしゃべつたり、椅子に腰かけあるひは三四人で立ち話をしてゐる。てんでんばらばらの服装は一種の武裝でもあるかのような感じだ。

つて悦にうつてゐる。表情が浮ぶ。よだれにぬれた口もとや柔らかな小さな手の感觸が目の邊りよみがえつてくる。八田田は親馬鹿精神の虜となつて、變な氣持ではあるが致し方なく店へ入り、財布を出し、代價を渡し、赤いガラ／＼をむき出してぶら下げたまま、驛へ戻つて行つた。改札口で切符を切る時、階段を登る時、ガラガラを持ち直した八田の耳に心持よくガラガラが鳴るのが聞えた。

停車場の列車の中は人いきれと煙草のけむりとで、窓々は全部あけてあるらしいがむし暑い、混雑で自分の手に握つた額赤いガラガラと前横の人の後姿しか見えない。誰も知つた顔も居らぬようだ。汽車は中々發車しない。ふと人混みの雑音にかくれるようにしてそつとガラガラを耳のそばでかすかにふつて見る。目をつむつて耳をかたむけると、遠い砂丘のかくの濱に波がはひ寄るに似たひびきがある。幾度かくり返してゐるうちに列車が走り出した。晴れた日の風がさわやかに流れこんでくる。

遠い砂丘近くの青い丘にかゝる橋上には舅が妻に抱かれて待ちうけてゐる。丘の橋の上にも風もふいてゆく。八田のガラガラをふりつづけながら覺えた幻想は、周囲の好奇の眼を感じた恥しきでばちんとわれてしまつた。そして父親となつて始めて子供供の玩具を買つてしまつた自分に氣がついたのであつた。

さつまいもの玩具か——とつぶやいて八田は急に立上つた。校庭のごく一部だけが草をむしられ、最早お正午近い日が八田の眞上にあつた。

近くでけたまゝしい汽車の汽笛が鳴つた。

地方文藝誌の動向

關伽井 第三號菊版三十八頁、磐女高文藝部昭和二十五年三月十日發行、非賣品、創作、戲曲、詩を收む。

郷土 創刊號菊版三十九頁、磐女高郷土
研究部、昭和二十五年三月三日發行。非賣
品、郷土の歴史研究論文を収む。
さはこ 卒業生特別號菊版四十七頁、湯本

高校文藝部、昭和二十五年三月十三日發行
非賣品、創作、詩、雜詠、送別の言葉、思
い出のきづな、クラブ便り等を收む。

文 窓 創刊號B、5版、二十四頁、磐城農業高校文藝クラブ、昭和二十四年十二月二十日發行、非賣品、創作、短歌詩を収む

三崎文學 第二號菊版三十三頁、平高文學クラブ昭和二十五年三月十日發行、非賣品創作、詩、短歌等を収む。

磐高文學 第四號菊版五十七頁、磐高文學ク
 ラブ、昭和二十四年九月二十三日發行。
作風 創刊號菊版三十九頁、作風社、昭
 和二十五年一月一日發行、定價五十五圓、
 創作、詩エッセイ等を収む。

葡萄園 第三號菊版五十三頁、東北配電平

地方文化について

營業所文藝部昭和二十五年二月二十五日發行非賣品、創作、詩エッセイ等を含む。聞思深 第五卷第一號近刊、菊版、古河岩礦好聞思深編集部、非賣品、創作、エッセイ、炭礦記事を含む。

いかけ 第二號 菊版一六七頁、平市仲町東和書館、昭和二十四年十月十三日發行。非賣品、平第三小學校父母と教師の會同密會編集に創刊號は20週年記念號。

校文學 創刊號は5版三十三頁、平市高校文學愛好會、非賣品、創作、詩、短歌等を含む。

文化の潮は、いつも中央から地方へと流れて行く様に考へられて居る。疎開した文化人は、よつて地方にも文化が芽生へたなど云ふ見方は、是れは山陰である。果して斯う云ふ見方は正しいであらうか。残念ながら今迄の日本に於いてはそうであつた様だ。と云ふのは日本の文化は絶対君主制の奥の強い封建制的なものであつたからだ。そして此の絶対君主制の奥が、地方の土に芽生へた芽を双葉の葉の中に枯死せしめて居たのだ。平に於いて起つた昭和初年の藝術運動を顧みれば此の事が頷かれよう。封建日本の犯した大きな罪だ。

編集後記

何か意義のあることをしたいと思つた。何か全身をぶつけてやることをしたいと思つていた。いろいろなことをやつてみた。いろいろのことで期待外れし、痛めつけられ、失望した。そんなことを足が地についていないからだと言つてくれる人もあつた。しかし私は尚も自分の意を通してつき進んだ。時代はぐんぐん進んで行つた。しつかり目を見開いていないと自分自身を見失ふことになりそうであつた。

文化運動と言ふものは経済的基盤が無い以上發展しないと言はれてゐる。一冊の本を出すにしてもいくばくかの元手が必要なことは當然である。然し文化運動は金儲けとは違ふ。それによつて飯を食う資金を得ることではない。それが缺損せずに行けば上々なのである。勿論儲ければそれにこしたことはないが、そうしたことが度量なると純粹さが失はれて行く動機になりそうである。

雑誌を出す計畫は前からあつた。福島民報の佐藤君、民友の後藤君、それに「文藝」にたてこつた菅田君等で、ソバを食つてブラッソをねつた。然し各人が夫々に職業を持ち忙

しく實現せられ終つた。その後菅田君は作風社を起し「作風」第一號を刊行した。

磐城評論の創刊計畫は昨年の秋からであつた。その頃、出そうか出さないかとぶすぶすくすぶすといふことをつきり方向づけてくれたものは大和田氏の言であつた。「新しい活字が入るから、どんどん利用して下さい。」この一言で決心がついた。

丁度、かつて「磐城春秋」にいた中里君が北海道から歸つて來たので、彼に協力してもらうことにして準備をすゝめた。ところが中里君は突然逝つた。その数日前、彼の私宅に自轉車で訪ねて來た彼と嬌附を一般づゝ飲んで話合ひ、「純粹な人間はなかなか生きれない。」「僕はいま生活費を得る爲主方をやつていますよ。」「そんなことを彼は言つたが、せつばつまつた死の極限にあるとは氣がつかなくつた。私は未だ彼の靈前に參らない、この雑誌が出来たら私は彼と逢つてこようと思つてゐる。

三月に入つて原稿の依頼も殆んど完了した一日、偶然大内君に出逢つた。彼は立教大學の學生で丁度休暇で歸省してゐるところだつた。前に大學の雑誌などを寄贈してくれたらして、面識のある間柄であつた。休暇中、彼

は全的に協力してくれることを申出た。

暖だ。季節の谷が通過して行くのだらう。ひとつとする様な寒氣の中で雨が落ちた。櫻が咲き始めている。今年もまた年々歳々の例にもれず、花は絢爛としてその美を表現することであらう。然し世情は常に花に背きがちである。花を花として卒直に認め、花と遊ぶ心のゆたかさを持ちたいものである。(伊作) 假名づがいには總て原文のまゝとした。

創刊號の活字は新活字が間にあわず、9ホによつたが、次號からは8ホで組む豫定である。

磐城評論

〔創刊號〕

定價七五圓

昭和二十五年四月十五日印刷

昭和二十五年四月二十日發行

編輯兼

伊作 牧 二

發行人

印刷所

株式 大和田印刷所

發行所

福島縣平市仲町三番地
イワキヤサロ内
磐城評論社

學生諸君に告ぐ

磐城評論社

一九五〇年の夏季休暇を迎えるにあたり、當社は、諸君の旺盛なる學問への熱情と偉大なる人間性への憧憬に答へ、ここに學生特集號を計畫し、全頁を諸君に解放して七月中旬發行するはこびとなりました。つきましては左記規定により原稿を全高校學生諸君より募集しますから奮つて投稿されるよう期待します。

規定

投稿資格者 高等学校學生に限る。原則としては石城郡内學生に限るも、他郡他縣よりの應募者をも認む。

作品内容

- 一、論文及研究報告書
- イ、現代學生生活の意義
- ロ、一般研究論文 政治、經濟、社會、教育、宗教、藝術、科學、何れの分野にても可
- 二、詩、小説、戯曲、ラジオドラマ
- 時代を問はず、なるべく磐城地方を背景とせるもの、戯曲ラジオドラマは各學校自立演劇団体の上演を目標とすること
- 三、その他

雑誌形態に發表可能な全作品

長さ 一、二とも四百字詰原稿用紙三十枚前後とするもその長短は限定せず
宛先 五月三十一日
発行 磐城評論社
賞金 本誌第二號 七月中旬發行
選考 壹萬圓(各項を一、二、三等及佳作に分ける)其の他投稿者全員に薄謝を呈す
備考 原稿には必ず投稿票を添附すること

No.

投稿票

票

磐城評論社

住所
氏名
學校名

何か意義
か全身をぶ
つていた。
ろいろのこ
失望した。
いからだと
私は尙も自
はぐんぐん
いていない
うであつた
文化運動
上發展した
すにしてま
當然である
う。それ
はない。そ
ある。勿論
が、そう
れて行く動
雜誌を出
の佐藤君、
たてこもつ
シをねつ

は全的に協力してくれることを申出た。暖だ。季節の谷が通過して行くのだろう。社を起し、「作風」第一號を刊行した。その後菅田君は作風しく實現せずに終つた。

內容

對歸資證券

り、の製菓者等、思ひ
林各 高麗學科學士に類する一類あり、
は、其地内學士の類なり。朝鮮書院と

與

室

學士論學

樂苑新編

わす、9
む豫定であ
（號）
一圖
牧二
町三番地
印刷所
町内可
論社

愈々發刊される

磐城每日新聞

記事が信用出来る新聞
一方的に偏しない新聞
民主主義を害し社會を
害する罪惡には勇敢に
戰ふ新聞
地方の進運には協力す
る新聞
家庭に親まれる新聞
飽迄郷土色を失なはな
い新聞
菊四切で寫眞版を掲げ
る地方唯一の新聞

印刷は藝術的に設備は文化的に早く良く出来る印刷所
寫真銅版と凸版とは迅速調製をモットーとし勉強する印刷所
九ボと八ボの鑄造機は毎日活動してゐる印刷所
是れなら一般印刷は勿論、賣物印刷には他の追従を許さぬ印刷所
平市仲町【電話七二九番】
株式會社 大和田印刷所



諸橋久太郎商店

第2回フィルム・ライブラリー

5月の欧州名畫祭

2日	キヤラバン
3日	逢びき
4日	カルメン
5日	しのび泣き
6日	悲戀
8・7日	ハムレット

會員券三回券綴

百圓(一般)

八十圓(學生)

會場 第二イワキ劇場

主催 内郷映畫同人

四月二十九、三十日、五月一日

霧の波止場

皆様の館、皆様の心の友として
第二イワキが晩春に送る藝術作品

監督 マルセル、カルネ
主演 ジヤン・キヤパン ミシエル、モルガン

定・價 七五圓